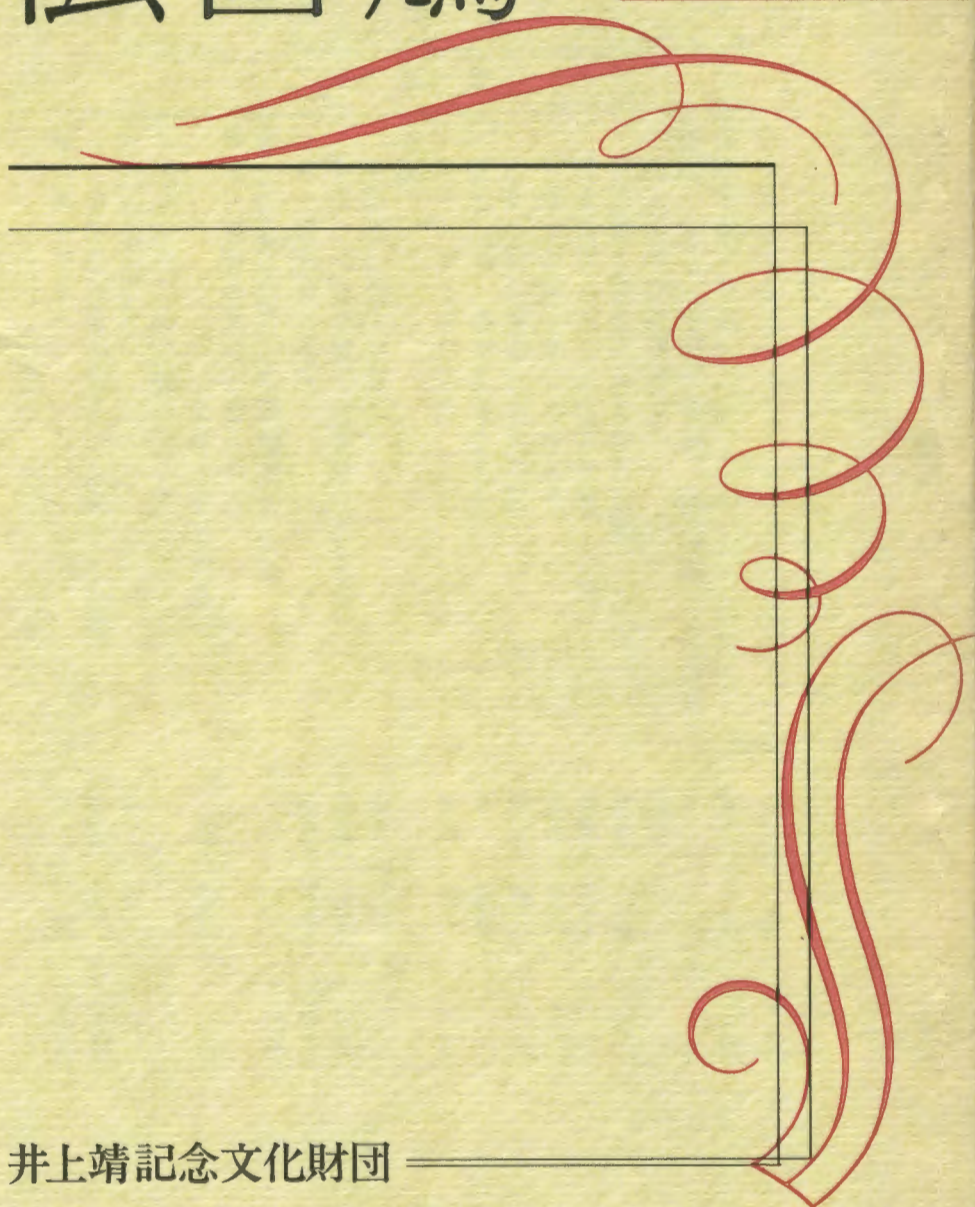


伝書鳩

第2号

井上靖記念文化財団

A decorative graphic element consisting of a black L-shaped line that forms a frame on the right side of the page. To the right of this line, there are several elegant, flowing red swirls that extend from the top right towards the bottom right corner.

目次

詩「年の始めに」	井上靖	二
挨拶「近況報告」	井上靖	四
特集・井上靖の文学館・記念館・記念室		
井上文学館の読書会	傳田 朴也	七
井上靖と伊豆近代文学博物館	梅原 實雄	一一
井上先生と石川近代文学館・年表	新保千代子	一五
「野分の館」からのたより	七瀬 英夫	二〇
小さな記念室のある町から	明定 義人	二三
開館して一年がたちました	表 憲章	二九
米子・井上靖記念館	浦城 幾世	三四
寄稿		
金昆羅の井上家について	薄井八代子	四二
金沢の「井上靖を読む会」のこと	森井 道男	四六
井上靖先生と金沢	新保千代子	四九
第二回井上靖文化賞贈賞者決定	・	六四
中国人民対外友好協会代表团	・	六四
旭川の井上靖記念館へ	浦城 幾世	六六
しろばんばの碑が建ちました	・	六八
財団事業報告	井上 修一	七〇
井上靖作品読書感想文コンクール作品	小森 史乃	七四
詩「雨上がり」	井上 靖	七六

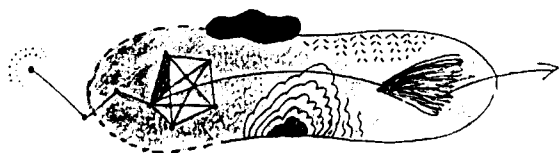


年の始めに 井上靖

南の珊瑚礁で生れた台風は、日本列島に沿って、北上して行きます。

歓迎すべきことではないが、これは永劫に負わなければならぬこの島の運命です。

しかし、そのあと、月明の夜が続き、日本海には三角の牙が、太平洋にはまるい鉾が沈みます。夜毎、それが沈んで行く音が聞え、秋の気は深まって行きます。これも永劫に変らぬ



この島の、秋から冬への静かな表情です。

ある日、突如、新しい太陽が東の海から上がります。島人は衣服を改め、丘に上り、磯に立ち、ひたすら新しい年が、争いごとのない年であることと、清らかなまつりごとが、島々に布かれることを祈ります。これも太古から変ることなき、この国の人々の悲願であり、その祈りの声で、列島の南には和らかい風が吹き始め、北海道には静かに雪が落ち始めます。

近況報告

井上 ふみ

「伝書鳩」は第二号を出すことになりました。

早いもので、靖が亡くなりましてから満四年が過ぎました。齡とともに一日が早く、一カ月が早く、一年は飛び去るように過ぎてしまいます。

一ツ橋綜合財団の御援助のもとに、超御多忙の先生方の選考の結果、今年の井上靖文化賞は、日本文学研究家のドナルド・キーン先生にお贈りすることになりました。贈呈式の折には、多くの新聞社やマスコミの関係の方々も出席され、報道されました。

井上靖記念文化財団は、ささやかながら確とした道を歩みはじめていると感謝いたしております。

私もみなさまからの暖かいご好意を受けて、自分な

りに一生懸命にお与え下さいました仕事に取り組んでおります。新潮社からは、この春、出版される予定の「井上靖全集」（全二十八巻別巻二）の月報へ載せる文章を、潮出版社からは、この秋に私の三冊目の著書の完成の実現に頑張るようにとの励ましの言葉を頂戴し、講談社の月刊誌「ソフィア」にも書かせていただいて四年目を迎えております。

靖も天上でみなさまのご好意を感謝し、はらはらいたしながら見守ってくれていると存じます。

私が元気でいられますのも、このように「・・・ねばならぬ」という気を張っていられるおかげと思っております。

（井上靖記念文化財団理事長）

井上靖の文学館・記念館・記念室

◆ 静岡県駿河平「井上文学館」

◆ 静岡県天城湯ヶ島「伊豆近代文学博物館」

◆ 鳥取県日南町井上靖記念館「野分の館」

◆ 石川県金沢市「石川近代文学館」

◆ 滋賀県高月町出会いの森図書館「井上靖記念室」

◆ 北海道旭川市「井上靖記念館」

◆ 鳥取県米子市「アジア博物館・井上靖記念館」

◆ 石川県内灘町立図書館「井上靖文庫」

◆ 静岡県天城湯ヶ島小学校「井上靖先生コーナー」

◆ 大阪府の個人文庫「大阪井上靖文庫」

◆ 奈良市「奈良公園館」

◆ 北海道旭川市「旭川北鎮記念館」

◆夏は夏草冬は冬湍の

文学館

駿河平

「井上文学館」

井上靖が中学時代を過ごした土地に建てられた文学館。井上靖の自伝的小説「夏草冬湍」は伊豆半島の沼津を舞台としている。

近くには幾つか井上靖の文学碑もある。文学館の前に「おもうち・沼津駅前」「もし原子力より大きい力を・沼津千本浜公園内」「千個の海のかげらが・沼津市民文化センター内」「ふるさとという言葉は・沼津東高校内」「潮が満ちて来るような・三嶋大社近く桜川沿い水辺の碑」「三島町を行くと・」など。

文学館は菊竹清訓氏設計の和風の建物。緑に囲まれた環境で、野外音楽堂やベルナール・ビュッフェ美術館等と共に公園の形になっている。

文学館として「友の会」の組織があり、一月二十九日井上靖の命日に毎年墓参の会を、定時に読書会を開催している。関東の支部会として「翌檜会」もある。

所在地 静岡県駿東郡長泉町駿河

平

電話 (0559)・八六・一

七七

交通 J R 三島駅からバス駿河

平行で文学館・美術館前

下車

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝

日の時は火曜日) 年末

年始(一月二六日から

一月三日)

入館料 大人・二〇〇円 小人・

一〇〇円 ただし作家の

誕生日の五月六日は無料

開館 昭和四八年一月二五日

井上文学館の読書会

『本覚坊遺文』を読む

傳田 朴也

井上文学館では、創設以来、井上先生の作品を中心に読書会を行ってきました。既に三百二十回に及んでいます。単に、網羅的に読みあさるという事ではなく、作品を選択してテキストにしていますので二回、三回、中には四回も読書会にとりあげたものもあります。当然のことですが、回数を重ねるたびに、新たな読書感を味わうことが常です。三百二十回続く中では、参加者の数にも、読書会の内容にも

波がありました。しかし、井上先生がお亡くなりになられてからは、参加者の常連も自然にかたまり、真剣さが加わり、読み方も深まり、時には、井上先生と対話しているような感動を共感しています。

十月の読書会は『本覚坊遺文』をテキストにとりあげました。記録を見ますと、はじめて昭和五十七年四月のテキストにされてから今度で四回目という

ことになります。しみじみと読み、味わい、そして「ああ、そうだったのか」と新たな感動と共にたしかかな納得をした次第です。今まで、どちらかというと、歴史小説としてとりあげ、野上彌生子氏の『秀吉と利休』と併読したりして、専ら、利休の自刃の謎を追い、ストーリーや構成に重点を置いて話し合ってきたように思います。この度は先生がお亡くなりになられて初めて読んだという事が、この作品を読む視点を、大きくかえたようです。

すべての人間にとって、最大の課題は、人間いかに生くべきかということだろうと思います。いかに生くべきかという問いは、最終的には、いかに死すべきかという主題に帰結するように思われます。しかし、大部分の人はこのような主題をかかえながら無意識にすごしているようです。しかし肉親やかけがえのない人の死は、強い衝撃をともなつて身にせまってくるのが常です。

作家にとっては、いかなる表現やストーリーを創造しても、人間が最終的なテーマになる限り、常に生と死の問題と対決し続けているのが、作家の宿命であると思うのです。

実は、先生がお亡くなりになられてからの読書会は、出来るだけ、先生の中期から晩期にかけてのものをとりあげて来ました。先生は、かつて、物語作家として新聞、雑誌の第一人者でありました。つまり、読者のための大衆作品を多く書かれました。しかし晩年には読者のためというより、「自分の書きたいように書く」、「自分の心の内を吐露する」、つまり、心境小説が先生の作品の中核に座るようになります。中期から晩期にかけての心境小説を読み続けて来ますと、その極点にある『本覚坊遺文』はまさに先生の遺書のようなすこさこわさをもって読者にせまってくる。先生はこの作品を発表当時、雑誌の対談の中で「利休の死の謎については、小説

家の私には調べようがないし、また、こういう事由によるものと、判断する度胸もない。ただ一つ言えることは、内面的なこと、心の内部のことだけとなります。利休の死の一番大切なものは、いかなる理由によってであれ、死によって完成する何かがあったということです。」と語っておられます。

つまり利休の死によって、侘茶の心は完成するのです。死は茶道から余計な粉飾を一切とり去り、そこに侘茶の本質が浮かびあがって来るのです。もう「あの冷え枯れた磧の道」を引き返すことはないのです。

利休の分身は本覚坊。本覚坊は、井上靖先生ご自身に他ならないとすれば『本覚坊遺文』は作家井上靖の死生観であり、遺文であるに違いないと思われます。

読書会の話し合いは、こんな形で終わりました。

(井上文学館・館長)





しろばんば飛ぶ故郷の

文学博物館

湯ヶ島町

「伊豆近代文学

博物館」

昭和天皇在位五十周年を記念して造られた「昭和の森」の「昭和の森会館」内に設置されている文学博物館。伊豆ゆかりの文学者の作品が展示されている一角に井上靖の展示コーナーがある。博物館の裏には昭和五十八年に移築した旧井上靖邸がある。代々医家として続いた家系らしく、医院として使われた患者待合室や、元薬部屋などの雰囲気も残る家で、作品「しろばんば」や「あすなろ物語」の舞台にもなっている。

近くにある井上靖関係の碑としては昭和の森会館傍らに「元日の教室でー」、湯ヶ島小学校校庭「地球上でー一番清らかな広場ー」、岳父足立文太郎の碑「懸命不動」は井上靖の撰文。滑沢溪谷「なぜかその中年男はー」、旧井上靖邸跡地「その頃、といってもー」がある。熊野山墓地公園には、靖筆の忠魂碑「魂魄飛びてー」が建ち、井上靖の墓及び井上家代々の墓もある。

所在地 静岡県田方郡天城湯ヶ島町

湯ヶ島九二の二八

電話 〇五五八・八五・一一

一〇

交通 J R三島駅あるいは伊豆箱根鉄道修善寺駅からバスで

昭和の森会館前下車

休館日 毎月第一第三水曜日および

年末年始（二月二十九日から一月一日）

入館料 併設の森林博物館ともで

大人・五〇〇円

小人・二五〇円

開館 昭和五〇年

井上靖と伊豆近代文学博物館

梅原 實雄

郷土の作家 井上靖

伊豆の昭和の森会館に設けられている伊豆近代文学博物館は、文字通り伊豆にゆかりのある作家の作品、原稿などが収蔵されている文学の館である。現在、約百二十名の作家の著書、原稿等が展示、紹介されている。

しかし当館のメインは何といっても郷土の作家井上靖であり、井上靖関係の展示面積は全館の四分の一を占めているのである。

シルク・ロード足跡展

現在、当館は井上靖特別展として、「シルク・ロードの足跡」展を開催中で、今年で三年目を迎えている。展示物は先年奈良で開かれたシルク・ロード博に出品された莫高窟二七五窟の弥勒菩薩交脚像、十七窟の洪聖（こうべん）座像の実物大のレプリカを中心に、壁画も展示されている。また、井上靖の作品の「敦煌」「楼蘭」「西域物語」、原稿、英、独、仏語等の訳本、井上靖が著作の参考にした西域

関係の厚い参考図書、それにシルク・ロードを訪ねた写真等が展示されている。

交脚像、洪誓座像は井上靖にとってゆかりのある像であり、特に洪誓座像は作品の「敦煌」とは切っても切れない関係のある像である。この像の背後に、大量の経文、古文書が封入されていたことは余りにも有名である。

なお、両像の前に誰ともなく養錢を上げているが、シルク・ロードの足跡展が参観者に実感を与えているのかもしれない。

弥勒菩薩交脚像、洪誓座像を見るにつけ、井上靖のシルク・ロードの写真にふれるにつけたまわなく敦煌熱が高まり、今夏、敦煌まで足を運んだ。そして、窟でまみえた両像に、いいしれぬ感動を覚えたのである。同時に、井上靖の壮大な想像力、卓越した筆力に、改めて感服した次第である。また、映画「敦煌」の映画村に立ち寄ったが、砂漠の中に造られた「敦煌古城」にはその規模に度肝を抜かれた。西安では、井上靖の「永泰公主の頸飾り」の主人公永泰公主の墓室に入り、石棺にふれ作品への想いを

深くしたのである。

「昭和の森文学・自然に親しむ会」を発足

当館では、「昭和の森文学・自然に親しむ会」を昨年九月より発足させ、現在第二期を迎えている。

この会は文学講座を主としているが、井上靖関係では、昨年は「しろばんば」洪作を探そう」というテーマで日大の藤沢全教授の講話を聞いた。場所はというと、井上旧邸の三間続きの広間を会場としたのである。ここでおかの婆さんが働いたという場所に身をおいた受講生の感慨はひとしおであった。

ついで、十一月には「しろばんばの里めぐり」として現地見学を実施。案内役は井上靖の同級生「しろばんば」に登場する光一少年こと足立芳郎さんと地元天城中学校の安藤先生にお願いした。井上邸跡をスタートし、洪作ゆかりの場所、すのこ橋、上の家、御料局、雑貨屋や、へい淵、かんざぶと、天城社などを巡り、雨天のため熊野山詣では止め、湯ヶ島小学校体育館で足立芳郎さんの話を伺った。「やつちゃん（靖）はお坊ちゃんだった。」など一味違

った話に参加者は大喜びであった。またへい淵近くの道端で「しろばんば」が舞い、参加者は「しろばんば、しろばんば、」と口々に声をあげ、またとない体験をしたのである。

第二期の本年（平成六年）は、十二月に「しろばんばパート2」として、第一期に引き続き藤沢全教授の講話を予定している。三月には、「熊野山そして湯道」として昨年に続いて「里めぐり」を行い、井上靖の墓参をする計画である。

当館では、他の場所ではまず不可能な講座を開講しているわけだが、やはり井上靖という偉大な作家の故里であるからこそ、その思いを深くしているのである。

「しろばんば」時代の地図を発行

天城湯ヶ島企画課、同教育委員会、同文化財保護審議会の企画制作により、「しろばんば」時代の地図がこのほど発行された。この地図の作成については文化財保護審議会などにおいて前々から計画中であつたそうだが、地図作りの作業が進展したのは昨

年のことであつた。昨年「しろばんばの里めぐり」を計画した時、当時の地図を欲しいと文化財保護審議会長の故宇田博司会長に伝えたところ、時をおかず地図作りの作業にとりかかつてくれたのである。

作業はまず当時の地籍図を貼り合わせ（畳四帖半の広さになったとか）縮小を重ね、当時の地籍を復元し、これに洪作ゆかりの家、場所を記入しできあがつたわけであるが、故宇田会長あつての「しろばんば」時代の地図といえる。図らずも、昭和の森会館の「親しむ会」が、地図作りを推進したわけであるが、天城湯ヶ島町が井上靖を大切にしている一端でもある。紙面を借りて一言申し添えらる、故宇田博司会長は白壁荘の会長であり、井上靖と親交のあつた方であり、伊豆近代文学博物館設立の立役者でもあつた。

伊豆きつての文化人の宇田会長は十一月三日文化の日に他界されたが、葬儀の時の井上ふみ夫人の弔電が印象的であつた。

（資料開発プランナー）

◆潮騒がえる北の海の町

にある記念室

金沢市

「石川近代文学館」

石川近代文学館は地方で初めての総合的な近代文学館として開館。鏡花、秋声、犀星をはじめ、井上靖など石川県にゆかりのある近代文学者の事跡に接する場所として設立された。井上靖も学んだ旧制四高の本館（現在国の重要文化財に指定されている）を文学館として使用。文学者及び四高関係の資料が展示されている中に、井上靖の記念室がある。

井上靖は金沢で高等学校時代をおくり、小説「北の海」、詩「流星」などの作品を残している。

鑑真和尚の亡くなった日と井上靖の誕生日が同日であることから、毎年五月六日に「若葉の五月詩人祭」を開催。読書会も行っている。

館の横に「流星」の碑、はなれては井上の筆になる荻生犀星の碑、徳田秋声の碑もある。

所在地 石川県金沢市広坂中央公園

内

電話 二（〇七六二）・六一・一六

〇九

交通 J R 金沢駅からバス香林坊

下車

休館日 年末年始（二月二六日から一月五日）

入館料 大人・四〇〇円

中・高生・一〇〇円

開館 昭和三十四年十一月三日

（井上靖の記念室開室は昭和六一年一〇月「流星」の

除幕式と同日）

井上先生と石川近代文学館

—— 年表で見る ——

新保 千代子

昭和四十四年十二月初旬 取材のためご来沢

昭和四十五年五月十五日 井上先生ご来沢

昭和四十八年八月二十三日、二十四日

井上先生の小説「星と祭」の読書会開催後バスを仕立てて湖北文学散歩を行う。前以て作品に出てくる寺を全て廻り、その中より七つの寺を選んで一泊二日の予定。二十三日の夜は余呉湖の海に面した民宿で一泊。金剛輪寺、西遊寺、長命寺、宗正寺、渡岸

寺、医王寺、石道寺の以上七ヶ寺を訪れ、それぞれに建築、壁画、庭園の素晴らしさと、渡岸寺の国宝の十一面観音はじめ宗正寺、医王寺、石道寺等々仏像の素晴らしさに圧倒された。

昭和四十八年十一月四日 井上先生ご来沢

金沢市に於いて泉鏡花賞が制定され、第一回受賞作に半村良「産霊山秘録」、森内敏雄「翔ぶ影」が決定。井上先生は選考委員長として第一回授賞式に記

念講演をされた。

昭和五十年三月二十九日 井上先生とご家族ご来沢
文学碑除幕式（河北郡内灘町官坂の運動公園内、片方に日本海をのぞみ、顧みれば背後は河北潟をのぞむ景勝の地に先生の「日本海美し……」の文学碑並びに副碑が建った。）

昭和五十年七月六日 井上先生御来沢

井上先生を囲む文学館の会会員の集い

昭和五十一年十一月十四日

講演と映画の会（映画「化石」 講演「井上靖の文学」 講師福田宏年氏）

昭和五十三年十一月九日 井上先生ご来沢

開館一周年記念講演会（演題「作家の立場」 講師井上靖先生）

第六回泉鏡花文学賞授賞式に於いての講演（演題

「金沢と文学」 講師井上靖先生）

昭和五十七年六月二十七日 井上先生ご来沢

徳田秋声墓碑建設（於材木町静明寺境内） 徳田家

菩提寺に亡徳田一穂氏の生前の要請により、文学館、金沢ライオンズクラブ、北陸放送の三者協力の下に徳田先生の分骨を納めて墓碑建立。墓碑銘及び撰文は井上先生のご執筆 墓碑銘執筆者として井上先生のごあいさつあり。

当日ご出席の遠来の方々（敬称略）ご遺族 徳田政子、徳田雅彦、徳田章子他 来賓 小田切進、野田宇太郎ご夫妻 来賓 地元側知事、市長他多数 除幕式の後、金城楼に於いて会食

昭和六十年十月十八日～二十日

文学館の会員伊豆方面へ井上靖文学散歩举行

昭和六十一年七月十一日 井上先生ご来館

旧四高校庭に先生の文学碑を建立すべく、その最適地をもとめて改めて現場をくまなく視察、種種ご相談する。

昭和六十一年十月二十五日

石川近代文学館は、旧四高図書館の建物より、重要文化財旧四高本館へ移転。移転開館記念特別展開催

のテープカットの後、井上靖「流星の碑」除幕式挙行。（撰文 山本健吉、設計 舟越保武）。井上先生は当日体調を崩されてご不参、代理としてふみ夫人並びに長男井上修一氏他ご家族多数ご出席。

当日の本館移転並びに、「流星の碑」建立記念祝賀会出席者芳名（順不同、敬称略）

舟越保武夫妻、山本健吉夫妻、山本安見、原泉、藤岡道夫夫妻、三宅立雄、小田切進、徳田雅彦、林屋辰三郎、杉森久英、高橋治、戸部新十郎、深田森太郎、北村さだ、長沢美津、桜田延良、広津萬里、高橋ゆり、藤岡多恵、西脇ユリエの諸氏他多数。

昭和六十二年四月二十四日 井上先生ご来館

六ヶ月前行われた「流星の碑」除幕式にご不参だった先生が、すっかりお元気になって碑の前にお立ちになる。

昭和六十三年三月三日

「敦煌」読書会

昭和六十三年三月二十五日～五月五日

大敦煌展開催 於文学館

昭和六十三年四月十九日

講演と映画の会（映画「敦煌」 演題「原作と映画の間」講師森井道男氏）

昭和六十三年五月五日～七月十日

輝く五月詩人祭（井上靖特別展 詩人祭 鑑真祭）

平成二年二月十八日

近代文学全集を読む会第二回（「井上靖集」講師 森井道男氏）

平成二年四月二十九日～五月三十一日

輝く五月詩人祭（五月五日井上靖特別展 鑑真祭

中原中也展）

平成三年五月六日～六月十日

井上靖追悼展（五月六日）ふみ夫人来館 鑑真祭

特別講演会Ⅱ於ニューグランドホテル（講演「孔子の世界」講師 小田切進氏 講演「井上靖人と文学」講師 三好徹氏 ご遺族挨拶 井上ふみ様 同日

「井上靖を偲ぶ夕べ」 映画「あすなる物語」

平成四年五月五日～六月三十日

輝く五月詩人祭（五月五日）井上靖特別展 鑑真祭

（講演「おろしや国物語語り」講師 岡部匠一氏 講演「映画おろしや国酔夢たんを観て」米田満氏 講演「原作と映画について」森井道男氏）

独唱と管弦楽演奏（鈴鹿市有志）Ⅱ独唱「大黒屋光太夫の歌」とフルート 野田克躬氏 テナーサクソ ス 中村盟氏

平成四年五月三十日～三十一日

文学館の会会員鈴鹿市文学散歩挙行Ⅱ井上靖文学碑

と「大黒屋光太夫」の遺跡巡り（鈴鹿市）

平成五年五月五日～六月二十日

輝く五月詩人祭（五月五日）井上靖特別展 テープ

カット 鑑真祭 詩人展（金子光晴・高橋睦郎）

平成六年五月五日～七月十日

輝く五月詩人祭（五月五日）井上靖特別展 テー

プ・カット 鑑真祭

詩人展（谷川俊太郎・矢内原伊作）

平成 七年度 予定

平成七年五月六日～六月二十日

輝く五月詩人祭（五月六日）井上先生特別展 テ

ープ・カット 鑑真祭

詩人 萩原朔太郎・作家 萩原葉子父娘展

萩原葉子氏のダンス「出発に年齢はない」 対談

「萩原葉子さんに聞く」

テープによる「井上靖自作詩朗読」

映画「KOYA」（井上靖作「澄賢坊覚書」の映画

化）監督Ⅱ村野鐵太郎 主演Ⅱ名取裕子、隆大介

株式会社ヒーロー製作

（石川近代文学館 館長）

◆ 野分ふく里の記念館

日南町井上靖記念館

「野分の館」

日南町は戦争末期、井上靖の家族の疎開地となっていた。ここを舞台にした小説「通夜の客」、詩「野分」「高原」等が生まれている。

記念館は六角形の建物でタシケントにある「バラクハン寺院」という図書館の建物のイメージに合わせて設計された。井上靖が、そんな自分の図書館が欲しいという夢を話したことから生まれたもの。記念館周辺は今も「通夜の客」の雰囲気そのまま残っており、美しい風景に時々キャンプを張りにくる人もいる。

館の前に碑が二基あり「ここ中国山脈の稜線」「ふるさと」。駅前には靖筆の標示が一つ。記念館の入口には訪問者用のノートが用意され、時に興味深い記述が町の広報に載せられたりすることもある。地元の人で読書会も開かれる。

所在地 鳥取県日野郡日南町神福

電話 問い合わせは日南町役場

(〇八五九)・八二・一一

一一

交通 JR伯備線上石見駅あるい

は生山駅からタクシーで二

五分

入館料 無料 休館日なし

開館 昭和三十六年三月

「野分の館」からのたより

——冬も雪道を開けて、休館日なし——

七瀬 英夫

今年もたくさんの方の来訪者をお迎えいたしました「野分の館」も初冬の厳しさの中に静かなたたずまいをみせております。今は周辺の山の木々の葉は真っ赤に燃え尽きて散り、館から見おろす田園も先頃の初雪にうつすらとおおわれ、今年も暮れようとしています。井上先生の詩「野分」にちなんで、この地に井上靖記念館「野分の館」が開館されてから、地元はそれを誇りに思い、大切に守ってまいりました。

た。地元福栄地域のかたがたは春、一面に花を咲かせ、夏草を刈り、秋、散敷いた枯葉を集め、冬には来訪者のために雪を除き、四季を通じて館の管理をしておられます。

小説「通夜の客」の舞台として先生が描かれたとおり、当地福栄は、岡山県境に位置する上石見駅からつづら折りの道を登りつめた峠の先に位置します。

戦時中先生が疎開先のご家族を訪ねられたおり、徒歩で登りつめた峠から見おろされた風景。道路こそ改良が進み昔の面影は残りませんが、田園風景は今も当時のまま少しも変わっておりません。

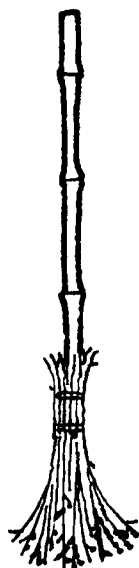
最近、この井上靖公園をもっと大きく整備しようという話を持ち上がっております。公園、休憩所、散歩道、スポーツ広場などを備えたものになるのではないかと楽しみにしております。

また、現在、本町では念願の文化・教育の拠点となるコンベンションゾーンの整備に取り組んでいます。文化ホール、図書館、美術館などにあわせて、井上靖の文学館の建設も計画しており、内容について委員会で検討しているところです。完成を平成八年の三月と考えておりますので、オープンいたしました節には全国からたくさんのかたがたにご来町いただきますようお願い申し上げます。

「野分の館」は無人ではありませんが、休館日は設けておりません。これから冬に向かいますが、雪景も当地の風情でございます。雪道を開けてみなさまのご来館をお待ちいたしております。

平成六年十二月二十三日

(日南町役場企画課・課長)



◆観音様の住まわれる町の
記念室

高月町出合いの森

図書館

「井上靖記念室」

井上靖の小説「星と祭」に書かれている湖畔の十一面観音像が縁となつて完成した記念室。井上靖の説が秘仏公開のきっかけになり、多くの参詣人がこの町を訪れるようになったいきさつから、記念室が建てられたもの。この記念室のテーマは井上靖と十一面観音との関わりに焦点を置いている。書斎を再現した一角もある。

館の前に井上靖の碑「聖蹟」、その碑の後ろに井上ふみの一言を刻んだ小さな石も記念されている。

図書館周辺には渡岸寺や、国宝の十一面観音、重要文化財の観音像などがあり、また、「雨森芳州」の記念館を守る小さな美しい村など、一見の価値ありと思うものが、たくさんある楽しい地域。

所在地 滋賀県伊香郡高月町渡岸寺

一一五

電話 二（〇七四九）・八五・四六

〇〇

休館日 毎週月曜日・火曜日、国民

の祝日・休日、年末年始、

特別整理期間

入館料 無料

交通 二 JR北陸線高月駅から

開館 二 平成五年四月二九日



小さな記念室のある町から

明定 義人

昭和四十七年「星と祭」上梓後も井上靖氏が幾度となく湖北を訪れたのは、渡岸寺や石道寺の十一面観音との出会い、それを秘仏として守り続けてきた民衆の一人としての山岡外次郎や観音堂で参詣人に世話をする老人たちとの出会いという、二つの出会いがあったからのように思います。

土地の習俗、信仰として秘仏を守っていくのではなくて、公開し観音様が本来のお役目を果たされるようにすべきだ、と説かれました。いろいろな方をさそってお参りに来られました。秘仏は公開されるようになり、湖北の十一面観音は「星と祭」でとりあ

げられることで参詣がふえ、氏の知人の随筆や写真でとりあげられることでより一層それがひろがりをもったのでした。

昭和五十七年、観音堂境内に「慈眼 秋風 湖北の寺」の文学碑を建てさせていただいております。

昭和六十三年にはじまるふるさと創生事業では、町はシンボリックなモノメントの設置を計画し、氏にご協力をお願いしましたところご快諾くださり、氏の文学碑と舟越保武氏の彫像「茉莉花」を中心とした「出会いの森」公園をつくり、公園内に「井上靖記念室」をもつ図書館を設置する、という事業と

して結実しました。

ご生前には計画が概ね決定しており、平成三年一月から準備室を発足させることとなりました。図書館をつくるのですから経験者ということで、成田市立図書館で司書をしておりました私が一月のはじめに高月町に転任いたしました。

その月の二十九日に氏は逝去されました。悲しみは申すまでもない事です、記念室の実現が危惧されたのですが、井上家の皆様のご理解とご協力を得て、遺品の品々と「星と祭」の原稿（複製）と、湖北の地と人との交流を写したパネルで、小さくはありますが高月にふさわしい記念室をつくることとなりました。

氏の多くの作品のなかにあつて、批評やマスコミと全く無縁のように思われるこの「星と祭」は無名の人々の感動によって読み継がれてきたのでした。

氏にみちびかれこの地を訪ねる人びとの心のひろがりに恥ずかしくないものでありたいとも、小さい

町が背負いきれない背伸びしたものになってはいけないとも思いつつ準備をいたしました。

平成五年四月二十九日、井上靖記念室を伴う町立図書館が出会いの森公園とともにオープンいたしました。舟越保武氏の彫像と並んで、彫像と高月町に寄せた文学碑「聖韻」が図書館の正面にあります。

「聖韻」の最後に

「世界的規模を持つ瞑想の町、信仰の聖地、湖畔散策の町としての、新しい時代の、新しい高月は、この日、このようにして生まれた。」

とあります。

当日は井上家の皆さまはじめ多くの方がたにご列席いただき、記念講演を司馬遼太郎氏にお願いし、町はじまって以来の大きな式典となりました。稲葉知事のご出席も町としては特段のことと受けとめられます。

司馬氏の講演にいったい何人の参加があるのか、

と思うと心配でなりません。当日は職員になるべく自宅に待機してもらって参加があまり少ないと動員をかける、ということになったのです。聞きにくい人など限られていて、弁当や景品をつけなければ人など集まるものか、とのまことしやかな声もありました。

ところが千人収容の小学校の体育館がいつばいになりました。これにはほんとうに驚きました。不慣れなこととて行き届かぬ運営でありました。失礼の段もありました。しかし、同僚にすれば精一杯のことでもあったのです。はじめてのことばかりでしたから、混乱のなかドタバタしているうちに一日が終わったのです。

この日をむかえるまで、実のところこの事業は積極的な支持を得てはいませんでした。本なんか読むのは限られた者だけといった意見が多いし、記念室をつくってみても活用できるわけがない、といったものでした。否定的な意見がたくさんでるのに本

格的な図書館をつくらうという結論になりました。

それは図書館に期待したひとたちの熱意にひっぱられてということであつたように思います。

しかしこの日を境にして出会いの森と図書館をめぐる空気は一変しました。新しい高月を感じさせたのでしよう。町民をはじめ多くの人びとに魅力ある施設として利用していただくこととなりました。本の利用率は初年度から日本一となり、利用する皆さんや関係者から驚きをもって受けとめられています。

記念室のほうは当初からひんばんな展示がえは考えないで、記念室の前の展示コーナーで年に一回ていど井上靖関係の特別展を企画する計画でした。学芸員がいて展示や資料の収集に専念できるというわけにはいきませんし、図書館の業務だけでも満足なことができていますではありません。

平成六年春は、井上文学館（沼津）よりパネルを借用し「水の風景 井上靖 詩と写真展」を開催し

ました。これは昭和四十七年に毎日新聞社主催の文学展のときに作成された、井上作品の舞台となつたところの風景写真と作品の一部がパネルとなつてゐるもののなかから、海・水・川と関係したものを選んで展示したものです。

秋には彫刻と素描による「舟越保武の世界」展もおこなわれました。ともに財団にご後援をいただきました。

平成七年にも写真展を計画しています。

渡岸寺の十一面観音の参詣者や井上作品の愛読者、公民館の文学散歩のグループといった方たちの見学もしいにふえています。

本を貸し出すという図書館本来の役割に、こうした本格的な文化との出会いの場としての魅力が加わり、わが町にはこんな活動をしている図書館があります、と紹介できる施設としての評価をいただくようになりました。まわりの町からの利用も多く、そのことが湖北での高月町に良い印象を与えることと

なりました。

「聖韻」を書かれたとき氏が明日の高月にという期待をもたれていたのか、今となつてはおたずねすることはできません。でも、よろこんでいただけるに違ひないと思っています。

この記念室をつくるにあたり、ご理解とご協力をいただいた井上家をはじめとする皆さまがたのお気持ちに、運営でもってしかお応えできないのですから、これからも町民の支持を得て、井上靖記念室を氏の町へのご功績を顕彰するにとどまらず、氏のまなざしに学び作品にこころを癒す場所へと育てていきたいと願っています。

もちろんできていないことがたくさんあるのですが、少しでも前進できていればそのうちにひとつひとつ実現に向かうことでしょう。人口一万六百人の町の行政がやっていることですから、なにことに時間もかかりますが、その時間のかかるぶんだけ町

民とともにづくりあげていくことになり、それが高月らしい記念室の運営につながればと思います。

高月という町で記念室をもつ図書館の仕事をすることになって四年余の月日がすぎました。よい現場と出会えたと思います。

こうした記念室や文学館は時の経過とともに忘れられて、訪ねるひととていない無用の館となりがちです。そうならないような工夫をいろいろと考えていかなければなりません。文学に縁のないものが担当しているのですから、すぐに行きつまるのが目にみえています。文学館からのご協力を得なければ困難なことが多いと思います。図書館のほうでは文学者記念室を伴う図書館交流会が平成五年度からはじまっていますが、各地の井上靖関係の文学館のネットワークができれば、図書館ではありますが参加させていただきたいと思っております。

住民のための図書館をめざした活動がはじまって

約三十年がたちます。同じような動きが博物館ではじまったのが約二十年前、文学館では約十年前の神奈川近代文学館の開館を先駆としていうことになるでしょう。くらべてみて、若いひとたちが活躍できる場のいちばん多いのは文学館だと思います。元気のいい学芸員の皆さんの活動から学ばせていただいて、高月の記念室が住民から忘れられないようにしたいと思います。

(高月町立図書館・館長)

◆ナナカマドに赤い実の

洋燈がともる記念館

旭川市

「井上靖記念館」

明治四十年五月六日、井上靖は旭

川春光町の師団宿舎で生まれる。

その辺りにいま周辺の市民の憩い

の場としての公園「井上靖通り」が

造られ、四季に分けられた通りには

井上靖の碑「自分が五月に生まれた

と言ったことも」や井上ふみの「靖

と旭川」の碑も建てられている。噴

水、モニュメント、と楽しい公園と

なっている。

協力組織として「井上靖ナナカマ

ドの会」が結成された。

所在地Ⅱ北海道旭川市四区一の二

電話Ⅱ（〇一六六）・五二・一

七四〇

休館日Ⅱ月曜日

入館料Ⅱ大人・二〇〇円 小人・

一〇〇円

開館時間Ⅱ午前九時から午後五時

交通ⅡJR旭川駅からバス「末

広四条一丁目行」で「四

区一条一丁目」下車

開館Ⅱ平成五年七月二四日

開館して一年がたちました

表 憲章

平成五年七月二十四日、井上先生が自伝的随筆「幼き日のこと」の中で「五月に旭川で生まれた。」

こう答えて、多少の誇りに似た思いを持った。私は物心がついてからずっと、自分が生まれた旭川という町にも、自分が生まれた五月という月にも、理由のさだかでない誇りを感じていた。」と語った旭川に、井上靖記念館は開館しました。

記念館は、市の中心部からバスで二十五分位のところにあります。記念館の前は春光園という公園があり、隣りには、旧第七師団の将校用の研修所と社交場を兼ねた偕行社（現在は、国の指定重要文化財

となっており、明治期の木造洋風建築で、白亜の瀟洒な建物。ここは、井上先生のお父さん隼雄氏も何回か利用されたゆかりの建物でもあります。現在は彫刻美術館として利用されています。）があり、静かで緑に囲まれた場所に立っています。

また、ラウンジから見える偕行社との間には、井上先生が旭川を思い作った詩に、「雪をかぶった赤い実の洋燈（ランプ）」と表現したナナカマドの木が赤い実をたくさんつけているのが見えます。

開館して一年がたちましたが、入館者は昨年（七

月（三月）まで一二、〇〇〇人で、今年は十月末で一八、〇〇〇人の入館者がありました。入館者は、旭川市民が一番多いと思われませんが、来館者ノートを見ると青森から沖縄まで、ほぼ全国から来ていただいています。特に、中高年の方の入館が多く、熱心に展示された資料を時間をかけてじっくりと観覧している姿が目立ちました。記念館は、観光バスが立ち寄る場所にはなっていないのですが、パンフレットなどを見て訪ねて来る人が多く、「活字だけでは伝わらない井上文学のイメージが自分の中に新しくできました。」「北海道旅行の思い出の一つになりました。」「井上先生の講演で花束を渡しサインをもらった思い出があります。この記念館に来てなつかしく思いました。」などの感想がノート四冊分に記されています。

次に記念館の構成ですが、展示室（二五三㎡）、ラウンジ（一〇九㎡）、研修室（二八㎡）、事務室

（二五㎡）となっています。ラウンジ内は、道産材を素材にした木製のテーブル・イスを置き、一度に四十人位の人が座り講演などを聞くことのできる広さです。またここには、井上先生のありし日の大きな写真を置き、その両側を書架にし、先生の全集、単行本など約五百冊程納めてあります。他に井上先生の生家の模型、金子臨亭先生が、井上先生の随筆「飛天と千仏」の一部を引用し書かれた屏風も展示されています。夏の間は喫茶コーナーとしても利用され、コーヒーを飲みながら先生の本を読む姿も見られます。

展示室は、大きいたてケースが、正面入り口から見て、左右に二面づつ、柱ケースが十個、覗きケースが四個で構成され、中央正面の壁面には平山郁夫先生の陶板画「流沙浄土夢」が設置されています。

展示構成は井上先生の一生を展示資料で構成するという考え方で組み立ててあります。具体的には井

上先生が旭川で生まれたことから始まり、その生涯を十枚の解説パネルで紹介し、その解説パネルに対応した資料を展示していますが、その資料の主なものには「闘牛」の初版本、「孔子」の創作ノート、先生が、ロシアの地名、北海道の地名を丹念に調べ上げ一つ一つ袋に入れてある「おろしや国酔夢譚」にかかわる資料、愛読した「長安の春」「新西域記」「敦煌物語」などの西域関係の書物。「流沙」「夏草冬濤」の新聞小説の切り抜き、新聞記者時代の取材メモ、「雪の面」の生原稿などですが、この他に先生と親交の深かった河井寛次郎（陶芸家）の壺、荒井寛方（日本画家）の仏画デッサン、前田千寸（井上先生の中学時代の恩師）の色紙、佐藤春夫の色紙なども同時に展示されています。

最後のコーナーは、旭川市が開基百年を迎え来旭した折に設置された詩碑の原稿、ふみ夫人の随筆原稿、先生が北海道に関して蒐集した和綴じの本、開拓期の本、アイヌ関係の本などがまとめて八十冊程

書架に納めて展示してあります。他に柱ケースと覗きケースには、晩年に母と旭川との思いを綴った「旭川ノート」「獵銃」の原稿、「敦煌での取材ノート」「親交のあった画家などからの書簡」「愛用の灰皿、万年筆、眼鏡」が展示されています。

なお、この展示についての指導助言については、浦城幾世氏を始めとして、日本近代文学館の清水先生、原先生、日本文芸家協会の高野先生に多大なご協力をいただきました。

また、記念館では展示事業の他に、自主事業として、親子読書会、文学散歩、文学講座を開催し参加した方々から大変好評でした。特に夏休みを利用して実施した親子読書会では一緒に井上先生の詩を朗読したり、井上先生の幼き日のことを聞いたりしながら楽しい一日を過ごしました。文学散歩も最初一台のマイクロバスでと思っていました。申込者が多く、二台で実施し、参加者から来年もこの催しを

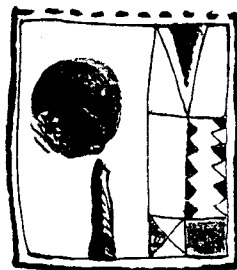
是非やって下さいという声を多くいただきました。

このような事業を行いながら記念館を成長させて行きたいと思いますが、この協力組織として、「井上靖ナナカマドの会」(平成四年結成)があり、会員百三十名で、会報の発行、自主事業への参加、ラウンジでの喫茶コーナーの運営などの活動を行っています。なかでも、喫茶コーナーの運営については、ボランティアで、自分たちでメニューを考え(旭川特産のリンゴジュース、トマトジュース、牛乳など)、六月から九月の土・日に実施していますが、「落ちついたラウンジの中で先生の本を読みながらのリンゴジュースはとてもおいしかった」などの声もいただき、来年はもっと充実させたいと会員の方がたは、はりきっています。

以上が記念館のあらましですが、この記念館が成長して行くためには、気軽に立ち寄り文学に親しむことのできる環境であることが大切と考えています

ので、ささやかではありますが、自主活動をもっと行い、井上文学の情報を発信したいと思っています。

(旭川井上靖記念館・館長)



◆シルクロード、蒼き狼、
そして柔道と井上靖の
夢を追及する記念館

米子市

「アジア博物館・ 井上靖記念館」

シルク・ロード、蒼き狼、と視点を絞った展示で井上靖を考えさせる特徴ある記念館。

多くの文化人が時を過ごした応接間、玄關、数多くの作品を生み出した井上靖の書斎などの綿密な再現に力を入れて造っている記念館。また井上靖の性格育成に深く関わりを持つ、その柔道歴の展示にも心を入れている。

織物、絨毯、ペルシャ錦など世界の二級品が数多く展示されている他の展示館も同じ敷地内にある。

所在地 鳥取県米子市大篠津町五

七番地

電話 (〇八五九)・二五・一

二五一

入館料 一般・一五〇〇円

大・高・一〇〇〇円

小・中・七五〇円

休館日 年中無休

開館時間 午前九時から午後五時迄

交通 通 JR 米子駅から堺線に乗

り換え「御崎口」下車徒

歩一五分

開館 館 平成五年九月二二日

「米子・井上靖記念館」

浦城 幾世

平成五年九月に鳥取県米子市に「アジア博物館・井上靖記念館」が開館した。ここは、井上靖記念館と次のような施設から成っている。

(一) 染織工房棟Ⅱ「藍染め」「織り」の工程の学習施設

(二) かすり館Ⅱ県無形文化財の地場伝統工芸「はまがすり」をはじめ日本各地の染織品の展示

(三) モンゴル館Ⅱ遊牧民の生活を知り理解を深めるものとして歴史、生活、民族、思想などに関する展示

(四) ペルシャ錦館Ⅱワシントン博物館、メトロポ

リタン美術館にあるペルシャ錦と共に世界最大コレクションと言われるナヒム・アナヒアのコレクションを展示。この十七、十八世紀のペルシャ錦はイラン革命の戦火をくぐって、アメリカを経て米子へ来たもの。

(五) 染料繊維植物園Ⅱ館内の敷地に約三百種類の繊維植物や染料植物を栽培。来館者に庭の散策を楽ませている。

ここの井上靖館の大きな特徴は東京の世田谷区に現在ある井上家の一部、玄関、応接間、書斎、を模したものに加えて展示室がある。この隣りには大き

なビデオ館がある。

応接間には井上家の応接間にあるものと同じ柄の絨毯が敷かれている。井上家の絨毯は、父が昭和四十八年五月アフガニスタン、イラン、トルコへ旅行した折、テヘランのアナヒアンという世界的な骨董屋（前記ベルシャ錦館のアナヒアンコレクションをした人）から入手したものである。

「絨毯とタピストリー」（昭和五十五年読売新聞社発行）に靖と平山郁夫氏、近衛暲子氏の座談会が載せられており、この絨毯を求めた時の様子が語られている。それによると、

平山 井上先生のお宅にある絨毯は素晴らしいものですね。

井上 アナヒアンの店の方ではなく、家に招待された時に、応接間の隅の方にきれいな絨毯があるのを見つけてましてね、こういう絨毯が欲しいと言ったら、「ない」と言うんで

す。「同じような模様のものが欲しい。探してくれ」「どうしてもない」。そして他の遺跡へ行つて帰つてきて、もう一回「少しぐらい新しいものでいいから欲しい」やはり「ない」と言うんです。それから確かトルコへ行くときでしたか、もう一度寄ったら「そんなに言うならこれを」と言うことになったのです。

近衛 古いものなんですか。

井上 百五十年くらい前のもので、実にきれいにこしらえてあるんです。イランの絨毯は色合いが派手で美しいですね。

このように父の思いが込められた絨毯は、敷かれてから二十年余りがたった。すっかり応接間になじみ、無くてはならない存在になっている。米子の記念館の応接間にも、何んとしても同じような絨毯が欲しかった。日本で絨毯商をやっておられるアナヒアンの娘さんをお願いしたり、いろいろ探したがな

かなか入手することは出来なかった。ある日、頼んでおいたイラン人の絨毯商カヴェさんから「同じような絨毯があったので見て欲しい」という電話があった。

作られた年代は新しいが、大きさも柄も全く同じで、こんなことはめったにないことだとカヴェさんは言った。テヘランへ商用で行った時、絨毯を扱っている仲間の家にお屋をご馳走になりに行った。その家の奥に大事に敷いてあるのを見つけた。奥さんが結婚のお祝いに貰ったもので売る品ではなかった。それをわけを話してゆずってもらって来たという。

世田谷では、井上の母が畑を楽しんでいるので、ここの庭にも畑が作っており、夏にはピーマン、ナス、トマトなどが植えられていた。この冬はハクサイ、ダイコン、青菜などが学芸員たちによって育てられている。

展示室は、四高柔道部時代を描いた作品「北の海」

とチンギス・ハーンを描いた「蒼き狼」を中心とした関係資料の展示が柱となっている。

平成六年九月、一周年記念式典が行われた。これに合わせて井上靖記念館では三カ月間、特別展を行った。これより二年目に入り、「友の会」作りも始まった。これからのことではあるが山陰地方全体に根を下ろした会にしたいと地元の方たちは頑張っておられる。

(井上靖 長女)

◆波の音ききて生きる人の

心美しき町

内灘町立図書館

「井上靖文庫」

昭和五十四年十一月、内灘町立図書館が現在地（同町大清水）に新築移転した際、「井上靖文庫」と名づけて記念室を設けた。もともとこの図書館は、創立にあたっての記念事業に井上靖文学碑を計画、昭和五十年三月に除幕するくらいに、井上文学を重視している。靖が四高在学時代に内灘の砂丘に何度も足を運び、作家として立つてからは、詩「流星」「海」、小説「北の海」をはじめ、多くのエッセイなどにも内灘砂丘と日本海の波のうねりを登場させていることを記念するためである。

同文庫は井上靖の著書と研究文献を収集所蔵するものだが、設立が新しいため、初期・中期の単行本は未収集である。

井上靖は同館新築を祝って詩「流星」を原稿用紙に執筆寄贈した。

近くに井上靖の文学碑「日本海美し」、「ある壮大なものが傾いていた」の二碑がある。

所在地 石川県河北郡内灘町大清水

台

電話 二〇七六二・八六・一

九三〇

交通 通 JR 金沢駅から北陸鉄道

浅野川線で内灘駅下車、

バス「金沢医科大学病院行」

で「大清水」下車。

開館時間 午前十時から午後六時迄

開館 館 昭和五十四年十一月

◆地球上でいちばん清らかな広場にある記念室

湯ヶ島小学校

「記念室」

湯ヶ島小学校二階の空き教室を利用してつくられている。入り口には「井上靖先生コーナー」と木製の標示あり。もと四階にあったものを新たに二階に展示しなおして出来た記念室。

「井上靖展」（平成四年九月から翌二月まで全国を巡った展覧会）の展示のため正確に再現して造られていた井上靖の書斎を、この旧教室に組立直し改めて展示している。

現在の湯ヶ島町の地図と作品「しるばんば」の中での地名を比較した地図の作成など、地元の小学校の記念室らしい暖かな楽しい展示。

校庭には井上靖の詩碑「地球上で・・」の碑がある。

この地の出身者でこの校庭に建つ足立文太郎の「懸命不動」の碑は井上靖の撰文になる。（文太郎は井上靖の岳父、解剖学者、軟部人類学の始祖と言われる。井上靖の作品「比良のシャクナゲ」のモデル、河上肇の「貧乏物語」のモデルと言われている。河上肇氏は京都で足立と隣同士の関係であった。）

所在地 静岡県田方郡天城湯ヶ島町
湯ヶ島小学校内

開 室 平成六年四月（改装年月）



◆一人でも多くの人に文学
に触れて欲しいと個人で
活動

峰岸成次氏の個人文庫。個人的に
集めていた井上靖関係の著作本や資
料を自宅の一室で図書館として開設
したもの。

所在地 大阪府和泉市青葉台一八の

三

電話 〇七二五・五六・六七

「大阪井上靖文庫」

文庫の内容 著作本で単行本、全集、

文庫本など、約五〇〇

冊。雑誌、関係書物、

図書館の参考文献コピ

ー、約五〇〇点。朝日

新聞二〇年間の井上靖

関係記事切り抜き、N

HKラジオ文化講演会

等のカセット、ビデオ

等三〇点。（必要あれ

ば実費でコピーいたし

ます）

一人でも多くの人に小説の面白さ
を、そしてここにこんな人生の生き
方があることを、知ってもらいたい
というのが、この文庫を開いた時か
らの私の願いです。（峰岸成次）



◆ここにもこんな展示が

なら・シルク・ロー
ド博記念館

「奈良公園館」

奈良公園を記念している記念館。

所在地 奈良市雑司町四六九

同時に一九八八年に開催された「な

電 話 〇七四二二・二二・〇

ら・シルク・ロード博覧会」も記念

三七五

している。

休館日 毎週月曜日 月曜日が休

博覧会当時展示された平山郁夫氏

日の時は火曜日以降で最

の飛天群舞図の陶板画やシリア沖の

も近い休日でない日

海底から引き上げられたアンフオラ

開館時間 午前九時から午後五時ま

(壺)、敦煌莫高窟の復元の展示な

で(最終入館時間四時三

どの中に井上靖のビデオが流れるよ

〇分)

うになつており、また博覧会開催に

入館料 大人・二〇〇円 小・中

寄せた文章も展示されている静かで

一〇〇円 団体(二〇人

贅沢な記念館。

以上) 大人・一五〇円

子供・五〇円

◆のぞいてみれば

「旭川北鎮記念館」

戦前の日本の軍隊の関連のものを
保存展示している記念館。

思いがけない所に井上靖の小さな
展示コーナーがあり、ほんの数点で
はあるが、展示されている。

軍人の子として赴任先、旭川で生
まれた作家として展示したもの。

靖の父、井上隼雄の赴任記録も残
されている。

スキーを日本に入れたと言われる
スイス兵レルヒの展示などもある、
おもしろい記念館である。

所在地 旭川市春光町陸上自衛隊

旭川第二師団内

電話 二二（〇一六六）・五一・六

一一一

開館時間 午前八時から、午後五時

まで（基本的には）

休館日 日・土曜日、日曜日、祭日

寄稿

金毘羅の井上家について

薄井 八代子

わが井上家の第一祖は六代前の玄春氏、明和年間、十七歳にして母を伴って四国からやって来、伊豆天城山麓のわが郷里の村に草鞋をぬぎ、医を業とし、生涯をそこで過した人物である。

彼は終生、四国に於ける生活については語らなかったで、その身の事情に関しては何も伝えられていない。逃亡者であったか、追放された母子であったか、一切は否として判らない。

私は十七歳の時、母を伴って、いずくかへ旅立つことを夢想した一時期を持つてゐる。それからまた、わが息子が十七歳になった時、彼が彼の母を連れて出奔しかねないことを、本気で慮ったことがある。こうしたことに思いを致すと、世々代々、わが一族は第一祖玄春氏が設定した暗示から自由になれないかも知れない。現在、玄春氏の墓石は、その全面を白い苔で覆われ、一族の者でなければ探しあてられぬ山の斜面の一画、雑木林の中に置かれている。ちよつとこれだけいい陽だまりを、私は他に知らない。月の夜もまたいいだろうと思う。

井上靖詩「わが家系」より

平成六年の夏、高松市にある菊池寛記念館で「井上靖展」が開催された。その折、来県された井上靖夫人が「先祖の井上玄春が伊豆の西平に金毘羅さんを祀っている」と言われた。井上靖先生の散文詩「わが家系」には玄春は四国からやって来たところがあるが、金毘羅さんのことにはふれていない。驚いた私は井上夫人の金刀比羅宮参拝のお供をして参拝し、金刀比羅宮図書館の松原秀明氏に「金毘羅の井上家」に関する古文書を探して欲しいとお願ひしたところ、早速「故事匡鑑」「庸昌記」「町年寄系譜」「古今進退録」の抜粋をコピーして送って下さった。

「故事匡鑑」によると、金毘羅大権現の基礎を築いたと言われ、今も奥社に祀られている井上宥盛は、生駒家家臣井上四郎右衛門家知の嫡男で、金毘羅大権現を総括する金光院に仕え、慶長五年

(一六〇〇)から慶長十八年(一六一三)まで別当であった。宥盛の弟、助兵衛は川鍋村で四百石を領し生駒家に仕えていたが大坂の陣で討死し、妻子は次代の別当山下宥晩にひきとられ、助兵衛―清兵衛―彦吉郎―平七郎―与三兵衛と続いている。尚別当は現在まで山下家が務めている。

「町年寄系譜」には小河徳介知が井上家を継ぎ、順庵―元庵―玄達―太郎左衛門と続いている。順庵は医師として金光院に仕え宝永四年(一七〇七)当時は町年寄も兼ねていたが、享保六年(一七二二)に世を去り、元庵も医師として金光院に仕え町方重立も兼ねていたが、寛保二年(一七四二)二月十一日、職を辞して伊予国川之江に移住している。金光院へは前年お目見えをすませた倅玄達が勤める旨届出ている。しかし一月後の三月十一日、玄達は離縁されている。玄達は産不詳と

あるから養子であろう。そして元庵は宝暦六年

(一七五六)に世を去った。

その後井上家の名跡を惜しんだ五条村の庄屋石井虎助の弟信蔵が、文化十一年(一八一四)の暮に願ひ出て元庵跡の養子となり、井上太郎左衛門と名乗り、町年寄や重立を務めている。

「古今進退録」によると天保十四年(一八四三)

正月井上太郎左衛門は先祖徳介知の生家小河家の名跡を継ぎ、小河五左衛門と姓名共に改めている。

前述の「故事匡鑑」「町年寄系譜」「古今進退

録」の撰者山下盛好は別当の一族で、明治十五年頃七十歳くらいで没したが、碩学で永年金光院に勤めた人で、山下盛好の資料は第一等のものである。金刀比羅宮図書館の松原秀明氏の言である。「庸昌記」の撰者香川庸昌も金光院に勤めていたが宝暦七年(一七五七)に「家密秘鑑」

をまとめている。

「庸昌記」では清兵衛の子古林は苗田村に移住。子供早世し逐電断絶の跡とある。

以上のように、資料は断片的であるが補足すると、四国、金毘羅の金光院に代々仕えた家に、宥盛——助兵衛——清兵衛——彦吉郎——平七郎——与三兵衛——徳介知——順庵——元庵——と続いて、元庵でとだえる井上姓の家があり、もしかすると、これが四国から伊豆に辿りついたという井上靖先生の先祖、井上玄春へと続くように思われる。なぜならば、元庵の死は宝暦六年で、この年、玄春は母を伴い三島に現れている。姓も井上、職業も医師で、四国から訪れている。これが偶然と言えるだろうか。伊豆に居を構えた玄春母子は、語りあい往時を偲び父祖の供養のため伊豆の西平

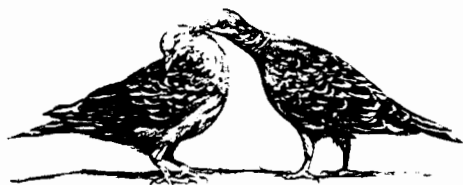
に金比羅さんを祀ったのではあるまいか、と考えるが資料は非情である。実証できぬもどかしさに今苦しんでいる。

(高松市在住、著述家)

追補一 藤沢全氏の著書『若き日の井上靖研究』

(三省堂刊)より。「その母なる女性には正徳元年(一七二一)の生まれで、二十八歳になった元文四年(一七三九)に玄春政信を出産し(嫡子か否かは不明)いかなる事情によつてか、その息子が十七歳になった宝暦六年(一七五六)に連れだつて四国を出、東海道を北上してひとまず豆州三島で草鞋を脱いだ。しかし火事にあつて浪人となり、やむなく伊豆山間部の湯ヶ島へと移った。宝暦八年(一七五八)母四十八歳、息子十九歳の時である。すでにこのとき、息子の方はひと通りの漢方医学を身につけていたので、未熟ながらもこの素養をもって湯ヶ島での生活の糧とした。」

追補二 井上玄春に始まる井上家は、玄春―俊達―元俊―玄達―玄碩―靖と続いている。



金沢の「井上靖を読む会」のこと

森井 道男

「井上靖を読む会」という集まりを今年（平成六年）四月から金沢の石川近代文学館の一室で開いている。今のところ読書会とも文学講座ともつかぬ形のものであるが、研究会というほど固苦しくない同好者の集まりになって行けばいいと思っている。

今年度は『わが一期一会』をテキストに選び、じっくり読んでいく。この連載エッセイは昭和四十九年五月から五十年一月まで三十九回、「毎日

新聞」日曜版に執筆されたもので、作者六十七歳。この年、月刊誌の連載は小説「わたつみ」（第三部）と紀行「アレキサンダーの道」の二本のみで、それと並行する週一回の「わが一期一会」は当時の重要な仕事であった。

四月の第一回にはその中から「木の下陰」と「雪の原野」をとりあげた。「雪の原野」には四高柔道部の道場だった無声堂における一年上の部

員たちとの別れの感慨が書かれている。その文章をかつての四高の教室をそのまま使っている文学館の一室で読むわけである。この日は同じ材料を用いた詩「無声堂」と「別れ」をエッセイと比較しながら読み込んで行った。

第二回は「光陰矢の如し」と「天上の星の輝き」である。「天上の星の輝き」もまた靖の四高時代を回顧した文章で、耳がつぶれるほどの柔道の練習量も、夜空の星に向かい合うちっぽけな人間が抱き続ける道徳律も、どこかで「克己」に通じている。しかも靖は、自分は一度も自分に克った経験は持っていないかも知れないと書く。

「光陰矢の如し」の方も人生への教訓を押し出していいところがいいので、靖の願いは人生の最終の段階に立った時、自分が人生を肯定する立場に立っていたという一点にかかっていたことを確認する。

第三回は日本中が記録的な暑さになった八月。金沢も例外ではなかったが、窓から洩れて来る蟬の声を聞きながら「老歌人の言葉」と「ゆるさざる心」に入って行った。「逝くものはまたかくの如きか昼夜をおかず」は、このエッセイでは人生解釈の一つとして引用されただけが、十三年後の「孔子」においては靖の考えは固まっていた。

この言葉に、孔子自身の老いに対する歎きや、結局は何事もなし得なかった自身の生涯に対する悲しみの思いが入っていると見る見方があるが、この見方を否定するのが靖の見解である。人の一生も人間の歴史も流れてゆくが、川の流れが大海に行き着くように、人間の歴史も太古からの夢である平和な社会の実現へと、いつかは繋がってゆくであろう、と解し、この言葉には大きく朗々とした明るいものが感じられる、と靖は強調する。

第四回、見事な紅葉に包まれた赤煉瓦の文学館

で、「ある空間」と「生と死の間」の世界のペー
ジを繰る。

父親の表現が傑出しているとして靖が賞揚して
やまない『海軍主計大尉小泉信吉』の、靖が引用
していない部分のコピーを配布して読む。闇の中
に「シンキチ、シンキチ」と呼ぶ著者の妻の声が
する一節などに、母親の思いも痛切に描かれてい
る。

「生と死の間」は父との死別を中心とした名エ
ッセイであるが、靖の死からさほどの年数を経て
いない読者からすれば、さらに複雑な感慨が加わ
る。今回は最後の小説「生きる」（平成二年一月
「群像」）の中にある三途の川の夢や、病院の廊
下で見た白装束の人物の像を、靖の「臨死体験」
としてとらえ、立花隆氏の近著『臨死体験』（平
成六年九月文芸春秋刊）の調査記述を照合する試

みもおこなった。出席者の中には周辺にそうした
体験を見聞している人も複数あり、発言が相次い
だ。

以後年内に「年の暮れ」「元日のこと」を読み、
年が明けて「点は墜石の如く」「一座建立」をも
って『わが一期一会』を終了、平成七年度からも
さらに企画を練ってこの会を継続してゆきたいと、
文学館の皆さんと御相談している。

平成六年十二月記・（日本ペンクラブ会員）

井上靖先生と金沢

新保 千代子

一 井上先生と金沢

「若葉の五月詩人祭」とは

井上靖先生はいうまでもなく、北海道のお生まれ、伊豆のお育ちで、北国の一地方都市金沢とは凡そ無関係、無関心でおありだった筈である。その先生がのちに「自身で金沢のことを『第二の故郷』とお呼びになったり、お書きになったりしているのに出会う都度、根っからの金沢人の私など、

とても嬉しく光栄に感じたものだ。これはひとり私だけの事ではなく、四高同窓生はじめ金沢には井上先生と井上文学に心を寄せる人々が多く、当石川近代文学館に於いては、例年五月六日の先生のお誕生日と「天平の薨」の鑑真和上寂滅の日の五月六日を重ねて「若葉の五月詩人祭」を開催している。その想いには井上文学の勉強を始めとし、若葉のように瑞々しい心でつねに鮮らしい詩の世界をひらき、真実に触れる願いが織りこまれてい

るので、具体的にも井上靖展覧会、鑑真まつり、詩人祭の三つを重ねて、井上先生を偲ぶ想いで美しく温かく包みたいのだ。

テープ・カットに続いて先生ご寄贈の由緒ある鑑真和尚の尊像のご供養を当市の名刹曹洞宗大乗寺の住職板垣興宗師にお願いし、参集者一同焼香礼拝。鑑真まつりのお下がりのささやかなお菓子はお菓子舗諸江屋謹製。詩人祭は過去に金子光晴・谷川俊太郎・立原道造等々の勉強を重ねてきた。

ネーミングのおこりはもう随分以前のことだが、井上先生にお目にかかっていて先生のお誕生日が話題となり、なにげなく「輝く若葉詩人祭」という表現が口をついて出たとき「故人を偲ぶのに××忌というのは、どこか暗くて僕は厭だな、まつり、祭りが良いですね」と即座に先生の弾んだお声が返ってきた。まさか、故人におなりになる日が来るなどとは夢にも思わぬ時点で出た「忌と祭

り」との話題だったが、その後若葉の五月の爽やかさが井上先生に最も適わしいとして、実に自然に「輝く五月詩人祭」は亡き先生を偲ぶ日だと、文学館関係者のすべての人の心に落ち着いた。

平成七年は井上先生の原作「澄賢坊覚書」の映画化「KOYA」上映と詩の朗読、それに特別展と鑑真まつりは例年の通り、更に、鮮やかな視野の拡がり勉強を期待する詩人祭は本年は詩人朔太郎氏と作家萩原葉子様との、個性豊かな父と娘を対象に、葉子様の積極的な協力による、楽しい企画を模索中である。

小説「北の海」と金沢

それにしても私は「井上靖と金沢」と題したこの稿を起こすにあたり、まずその両者の最初の出会い、ご縁の初めがいつ、いかなる形で出発した

か。金沢から発信されたものかどうか。いかなる形で金沢が井上先生を捉えたかを、押さえておきたいと思う。その為にその間の事情を最もよく語るとされる先生の小説「北の海」の再読と、年譜の援けを得るのを平行して、改めて第一歩から考えてみたい。今更何を——とお叱りの声があるかもしれないが不勉強な私自身のためにも。

「北の海」は明るくてユーモラスで、主人公の洪作はじめ登場人物に、味のある性格付けをするのがお得意の井上文学の魅力が大いに駆使される一方、巧みなリアリテイの盛り方でぐいぐい作中に引き込まれて頗る楽しい。短絡的に登場人物を實在の人物と考えるのを警戒しても、洪作が井上少年に重なるのは作者も承知の上のことらしい。

大正十五年三月、沼津中学を卒業した洪作は静岡高校の受験に失敗したが、受験勉強は秋からと、暢気に構えて中学時代同様毎日道場に往って柔道

ばかりやっている。そこへ金沢の第四高等学校の柔道部の選手の実が、四高を卒業して目下沼津中学で代数を教えている先輩を訪ねてくる。蓮実は洪作らと一緒に柔道の練習をさせて貰うことになり、先ず洪作が立ち会うが三回とも蓮実に押さえ込まれて完敗する。次いで、からだが大きく、自分でも強いつもりで遠山が立ち会って、簡単に蓮実に二本取られ、真っ赤になっていきり立ち、技を掛けようとするが、逆に押さえ込まれておとされてしまう。新潮文庫の『北の海』九十三頁、

「・・・洪作はこれまでこれほど魅力のある若者に会ったことがないと思った。」

とあり、当の蓮実は洪作に向かって、

「僕たちは練習量がすべてを決定する柔道を造るうとしてゐる。どうです。協力してくれませんか・・・」

と話しかける。

「洪作は黙っていたが蓮実の言葉は体中にしみ渡っており、軽い酩酊感が洪作を包んでいた。」

当時洪作は既に台北の両親の許へ赴くべく伊豆の親戚まわりをすませ、餞別も貰って一日も早く出立つべき状況下にあったにも拘わらず、蓮実から受けた感動の命ずる儘に、手拭い一本腰にぶら下げ金沢へ向かう。

四、五日のつもりが呆れた事に金沢で十何日を送る。四高柔道部の連中と金石海岸へ行き更に日本海岸沿いに一里半、砂丘のある海岸まで足を延ばして、砂丘の一つに登って、沼津の千本浜とは較べようのないスケールの大きな海岸に立ったと感ずる。

ああ幽冥の霧はれて

潮騒冴ゆる北の海

連中と共に四高の寮歌を高唱して、「ああこれこそ潮騒冴ゆる北の海だ・」と感動する。

井上靖を金沢に結びつけたものは、まさしく蓮実が与えた酩酊感であり、更に日本海を前にして共に歌った四高の寮歌だった。委しくいえば、それは当時の金沢の人間なら女、子供でも知っていた「潮騒冴ゆる北の海」の男性的で感傷的な歌詞と、曲と、コーラスとに重なった波の音であったのだ。つまり蓮実と日本海が洪作を捉えたのであった。ここで私は愚かにも現実の蓮実が誰だったかを知りたいと切に思っている。

金沢時代の井上少年

大正十五年八月、年譜によると（福田宏年氏作成の年譜を引用）、父の金沢転勤が決まり、台北の両親の許にあった彼は、家族と共に内地に引き揚げ、金沢市では先ず彦三にあった官舎に落ち着いた。後日の本多町や桜島などのお住居が犀川口とすれば、彦三は浅野川口と称されるいま一方

の金沢文化圏に属し、藩政時代以来犀川口に先んじて開けていた繁華街の尾張町へはほんの一足で、先生は尾張町にあった洋画専門の映画館第二菊水へたびたび通ったと、かつて話されたことがある。

井上先生の先輩で、四高を大正十四年文甲卒の作家森山啓氏は「僕の四高時代」と題する回想録のなかで「福井中学の四年を終了して四高生となるや否や映画館に入りびたりとなった」と書かれているが、第二菊水は四高生に最も人気があった高級な洋画の封切館であり、映画と柔道と受験勉強と三者の折合いが井上先生の中でどうついたのか、受験は成功した。

昭和二年四月、第四高等学校理科甲類に入学。

昭和二年四月二十一日、この日稗史に名高い加賀火消の伝統をうけて、民間消防の発達していた金沢としては、払暁三時半に出火した火災が、夕刻六時四十分になって漸く鎮火、珍しく大火とな

って彦三一番丁から八番丁まで、さしにも広い彦三いち円が焼野原となった。四高生になったばかりの先生は袍一つを持って衛戍病院長の父君の關係で、軍差廻しの護衛係の案内でひとまず出羽町にあった借行社へ避難、家族一同ことなく、数日にして本多町三番丁六ノ一、馬小屋付きの押野谷久兵衛氏持ち家の大きな屋敷に移られた。この家では重い門扉の開閉が女中の手に余り、朝夕四高生の先生のお仕事になったとか。これも先生から伺った記憶がある。いま考えると馬小屋があるのに馬丁はいなかったのであろうか。

昭和三年この年父君は弘前第八師団へ転任。

先生は再び家族と別れて、寺町と犀川の間の細長い町桜島六番丁十三番地の銀行員大塚氏方へ下宿をされた。この家を私は訪れた事があり、古い記憶だが玄関を開けると式台の向かって左の壁際に階段があり、階段を登った奥の八畳が客間

で、玄関の上になる六畳が先生のお部屋と伺ったような気がする。階段の上り口左手に高窓があり、柿の葉が窓硝子をこすっていた。その時、これなら窓から柿の実を容易にもげそうだと一瞬思ったのは、吾ながら四高生というとき、腕白小僧扱いで愛していた金沢市民の心理に、私もいつのまにか染まっていたようだ。

四高時代の柔道の選手としての先生には、大変なファンがあった。四高には何の関係もない民間人なのにその人は、名古屋の八高、岡山の六高、京都の三高とのそれぞれの戦いで、四高柔道部の遠征となると必ず応援のために同行。南下軍の応援団が当時どの様な状態だったかは知らないが、先生より五、六歳は年長と見えるこの人は、先生の四高時代だけではなく、昭和六十年頃までも先生が来沢されると必ずお宿へ伺って、お顔を見るのが最高の喜びだったらしい。先生もまたその老

人には実に懐かしそうに相好をを崩して、お部屋へお迎え入れになるのだった。

能登の裕福な農家らしく、老妻と二人金沢に住んで井上先生とお親しいという事が老人の生涯の喜びらしく、井上先生が大将として四高柔道部に君臨され、小柄な先生が大きな敵将を片っ端から寝技で倒してしまわれるのがどんなに水際立って素晴らしかったか、くり返し語って飽かぬ様子に、私は一度その老人の話を書き留めたいと思わぬでもなかったのだが「あの人はこまいからで、どんな強い大きな敵でもみんな押さえ込んでしまう。そりゃ強いもんじゃった」とくり返されるのみでもう一つ具体性に欠けるので積極的に取材する気になれなかった。その後先生から彼の話をテープに取って欲しいとのこと依頼をうけ、急いで小立野の家を訪れた。

先生の著書を飾った部屋でテープを廻したが、

いくら水を向けても同じ感嘆詞のくり返して、先生にその旨をご報告するしかなかった。「矢張りもう駄目でしたか」と失望のお声に接したのは私としても本当に残念だった。

老いとはかたみに情けないもので、いまの私にはどうしてもその人の名が思い出せない。夫人も既に亡き人で、小立野の家も建て替わって知る人もない。

井上先生を内灘にご案内する

昭和二十七年九月から足掛け七年、天下の耳目を石川県の一漁村内灘村へ集めた戦後の大きな日米間の事件の一つ、内灘試射場問題では実に多くの日本中の知識人、文化人が吾も吾もと石川県を訪れ、鉄板道路を超えて権現森を望んで立った。

井上先生を現地へご案内したのはそうした雑踏のすべてが終わったあとだった。

索漠とした灰色の風景の中の先生、取り残された米軍の壕舎と暗い日本海を背景にした実に淋しい光景が一枚の写真のように眼に浮かぶ。年譜には昭和三十一年一月と、三十四年十一月と二回のご来県が記録されているのみで、半日の内灘行きをそのどちらだとするか確かな記録をもたぬ私の不束さが、お恥ずかしい限りだが、石川県経済部長宛の関係書類によると、昭和二十八年一月一日から接收された内灘村地元海面は、昭和三十二年一月一日から、一応制限解除になる旨が記されているものの、現実はその訳ではなかった。危険は「試射場への立入禁止について」との昭和三十三年三月二十六日付けの、内灘村村長から室、西荒屋、黒津船、宮坂、大根布、向栗ヶ崎の六ヶ村N各字区長に対して出された厳しい通達が語っている。

「不法立入等の場合は刑事特別法の処理は従前

どおり云々」と、立入禁止の一般周知方のより一層の徹底を指示している点、不発弾の不祥事はその後也大いにあったものか、先生が米軍壕舎の残る海岸にお立ちになったのは、三十四年十一月三日から六日までの、ご来沢中の一日と推定、この時より以前とは考えられない。先生のご来沢はこの稿の前半「井上先生と金沢」と題すべき年次中にはこれで終わり、昭和四十年代からは「井上靖先生と石川近代文学館」と題して後半のご報告に移りたい。

川の話（蛇足）

昭和三十五年九月、有紀書房刊、井上靖編『川』は、日本の川二十五をとり上げて、二十四章に分けてそれぞれその川について過去に書かれた各作家の文章、或いは詩を再録又は抄録して添え、冒頭に写真、終わりに小さな地図と簡単な案内、あ

じ、みやげといったものを附記した、まことに親切でユニークな編集である。

この本の魅力の第一は「まへがき」の代わりに先生の数年前に発表された随筆の「川の話」を「まへがきにかえて」と題してながながと再録、先生らしく川の話の中に、平凡な人生を生きぬいた人の、ある特別な日の姿を書きこんだ辺りがまことに心をひく。この本を愛蔵書の一冊に加えて、かつて『星と祭』を手に、先生が訪れられた湖北の寺々をひとりで全部廻ったように、いつの日かこの本を手に、先生が「川の話」の中で書いておいてになる川や、先生がこの本の為には選ばれて、ご自分を加えて二十三人の作家の文章や詩がそれぞれ添えられている川を、山登りの出来ない老女が一人川を尋ねて、その近くにある温泉にでも入る旅にしてみたい誘惑にかられている。

もう随分以前、沼津の狩野川の橋の袂にあった

美味しいと評判の鰻屋で、流れを見おろしながら先生のご馳走になったことがある。

盛り上がるように豊かな水量で、激しい水勢をみせて流れていたその日の狩野川が、私には金沢の犀川よりはるかに大きい川だという印象をもったのだが、その後この川についての話題で先生は、犀川の方が問題にならぬくらい大きいと仰有るのに、私はまたしても「第二の故郷説」と同じ、井上先生の金沢びいきを感じたのだった。「川の話」の中には勿論狩野川は入っていない。そして真先に「金沢の犀川」と名をあげて美しく描写し「百万石の城下町に適わしい気品のある川」とまで書いていて下さるのだ。私はごく稀にだが厳しい一面を垣間見た事があると思う先生に、高等学校という青春が刻んだ甘い金沢びいきを感じないではられない。

二 井上靖先生と石川近代文学館

文学館開館の頃

昭和四十三年十一月三日、金沢の石川近代文学館開館。井上先生より開館記念のパンフレットに玉稿を賜る。左に転載させて頂く。

「文学の館をたたえる」

井上 靖

こんど石川近代文学館を見せていただいた。鏡花、秋声、犀星といった物故大家のものは悉く集まっている。こうしたものが各県にあったら、文学研究家にとってはどんなに有難いことだろう。併し、こうした企画はよほどの見識ある推進者が無い限りなかなか実現は望めない。

石川県が全国に魁けて、こうした文学の館を持ったことはたいへん立派なことだと思う。

私もまた、四高に学んだというだけのこと、この館の一隅に著書を並べていただけたという嬉しいことである。

この時頂いたお言葉は現在も心から有難く感謝申し上げている。お書きになっている冒頭のお言葉からも解るように、先生は開館の一ヶ月前に、未だ公開前の文学館をご覧になったのであった。

この日の先生は次女佳子様を伴ってご来沢、金沢駅へお出迎えした私のご案内で、金沢市広坂二―二五、財団法人石川近代文学館の最初のお客様であった。金沢一の繁華街香林坊に隣接した中央公園に、もと第四高等学校図書館を少しだけ改装した三十坪三階建ての小さな建物を県からお借りして開館したのだった。既に壊す予定だった建物、それも各方面から県へ貸与方要望の申し入れがいくつもあった、いわば一部の方々の注目の的の建物の使用を文学館に許されたのは、全く前年六月、川端康成、伊藤整両先生がわざわざ県へお出向き下さったのご要請と、中西前石川県知事の文学館へのご理解の賜物であった。

折角の井上先生のご来館であるから開館前といえどもすべて開館時と同じ形に飾りつけた館内をご覧になった先生は、その夜は、美しいおかが待つ「にし津旅館」へお入りになり、四高時代の級友で柔道部の仲間でもある竹林八郎氏と合流。

翌日は竹林氏のご案内で氏の母校富山県高岡中学校で講演のご予定だった。

翌朝先生は高岡へ、私は先生のお留守の間に佳子様をご案内して、能登内浦の海岸を山手に入った国見部落の国見太鼓を見に行くことにしていた。当時私は実業之日本社のガイドブック「北陸・能登・金沢」を書いていたら、能登一円をくまなく歩いていた。キリシタン大名高山右近の娘が天狗退治をするところだなど奇想天外の発想の人形をのせた山車が出たりする、内浦の祭りの魅力に私はすっかりいかれていた。かつて、井上先生を鶴来方面へご案内中、たまたま村の少年達の

勇壮で健気な獅子舞に遭遇して、先生が、「これこそ本当の日本の姿ですね。ふるさとの祭りですね」と涙を流さんばかりに感動された事が思い出されてお懐かしいにつけ、この頃のすっかりショウ化している太鼓打ちよりも、素朴な本当の村の祭り太鼓を佳子様に能登の太鼓の代表としてお聞かせしたいと思ったのだ。仲良しの北陸放送のプロデューサー金森千栄子さんも誘って女三人、山の鎮守の神様の太鼓を打たせていただきに参上したという次第だ。

輝くような木漏れ日のさす神前の、ささやかな広場に据えた国見太鼓を、先ず村人が打って下さったのを真似て私たちもこもこも力一杯打つ音の清々しさ。やや冷やかな山気に、心も浄化するような得難いひとときを感謝してお暇を告げる三人に、めいめいにみことな松茸をお土産といつて沢山くだされたのには、改めてこの小さな山村の山の幸の豊かさに驚いた。

能登のご旅行へお伴する

昭和四十四年、五月十四日、井上先生ご来沢。

「北の海」取材のため、挿絵担当の風間完画伯をご同道になり、先ず金沢から金石を経て大野に至る電車の、金石停留場で丁寧にメモをおとりになる。次いで同停留場の前にある銭屋五兵衛の記念館に入って、大きな大福帳の形をした銭五の「年々留」や、筒状のみことな望遠鏡などをご覧になり、犀川が海に注ぐ金石の河口から、銭五の木像や礎になった三男要蔵の墓のある釈迦堂にも立ち寄ってから金沢へ引き上げられた。

翌十五日はご休息のおつもりか、風間画伯と先生は片山津のゴルフ場へお出掛けになり、競技のち風間氏はその儘ご帰京になり、先生はにし津で再び竹林氏と合流。翌十六日、私はお二人を

能登へご案内した。

東京の荏原製作所の創立者、畠山一清氏が先祖の居城、松波城のあった内浦町へ青少年の精神と武道の鍛錬のために、畠山武道館を寄付された。

その記念に井上先生にご講演をお願いしたのであった。ご講演終了後一同の乱取りというのか、激しい稽古ぶりをご覧になった。多年荏原製作所に在籍して畠山氏の薫陶をうけた竹林氏に、井上先生のつゆ払いといった形でお供をして頂いた次第であった。

一清氏の祖先、畠山義親は七尾城にあった兄城主亡き跡、幼い甥を援けて有名なあの上杉謙信の来襲に最後まで抗戦したが、力つきて自らの居城内浦の松波城に退いて自刃して果てた。

往年の画家に描かせたみごとな肖像の掛け軸が、五反田の畠山記念館の三疊台目の本席に掛けられていたのを拝見した事がある。一代の治世に名君

の名を残した人らしい。

京都にあつて今川家、京極家らと共に古来名族の家柄だった畠山氏が、室町時代以降守護として能登に下った。近年居城松波城跡に、素晴らしい室町時代の庭園が発掘され、研究家を喜ばせた記事が、新聞紙面を賑わした事がある。そうした名家の末裔として一清氏は財界人中、茶道、能楽の各界に殊に重きをなし、見るからに古武士の風格を備え、発明家協会会長他、学究肌の反面に、実に洒脱でユーモアを愛する人物でもあった。

氏に心酔して生涯側近にあり、犬馬の労を惜しまなかった秘書のA氏は、もと過激な思想の遵奉者で始め反感を以て近付いたのが氏の人間性に触れ、一転して最も忠実な部下となり、A氏の家には夥しい各方面の書籍が備えられ、いかなる畠山氏の質問にも即座に答え得る態勢がとられていたと仄聞している。

不思議に私の子供の頃から畠山氏と私の父との間には年齢を超えて特別の交情があったらしく、父亡き跡の兄達は事業の上でもずいぶん畠山氏の援助を受け、晩年末っ子の私が石川近代文学館の設立に努力している旨近況報告に伺った際もとても喜んで、最高額の援助者の席について下さったのだった。そんな長い歴史の上にある、私と竹林氏とのお親しさでもあり、会社重役の立場にある男性の彼が素人離れのずば抜けた三味線の名手であった点にも、竹林氏は、粹人一清老の衣鉢を継いでいたといえなくもない。

畠山記念館が井上先生にご講演においてを願ったのも、竹林氏からお願いしたものと思われるにつけて、私でさえ一清氏のおもしろい逸話はいくつか心に残っている、すぐれた一清氏の人となり、いつか竹林氏から井上先生のお耳に入って、そんなエピソードを井上先生が何かの形でお書き

下さったらどんなに素敵だろうと、実はひそかに私は空想した事もあったのだった。

武道館を後に一行は、内浦町の町長による接待で九十九湾上に船を浮かべた。海上の景観を肴にお二人に盃をあげていただく趣向であった。

町長は能登の名酒「百万石」の醸造元で社長、純朴極まる能登人で平素から大事な大事な畠山氏の武道館のためにお出で下さったお二人のご接待に誠心誠意であたり、その夜能登海濱ホテルでの酒豪お二人は、四高柔道部時代のお話しがホテルの窓が白むまでつきなかつたのではないだろうか。私は早く失礼して当夜のことは何一つ記憶にないのだが、私には「井上先生の宴会」として忘れられない一夜がある。先生の宴会はいつもそんな風で「つば甚」の一夜は珍しくもないのかもしれないが、私は本当に驚いたのだった。

金沢では一流料亭で芸妓の侍らぬ長時間のお酒

の席など私達には殆ど考えられない。その夜の先生のお座敷には、女性には次女の佳子様と私だけ、先生の他には二村カメラマンとたしか編集者のF氏との五人は記憶にあるのだが、その他の方が解らない。つば甚で夕方六時から始まって九時すぎまで三時間以上、くり返すようだがお酌無しで、つば甚の女中さんもお酒を運んでくるだけでお酌などしないですぐに姿が消えた。そのあとの座敷の明朗、活発、大いに飲み交々歌って笑いの絶えない賑やかさだった。

先生が「格子戸をくぐりぬけー見上げる夕焼けの空ー」と先ず歌い出される。そして「君やり給え」といった調子で佳子様へハトンタッチ、佳子様が間髪を入れず「だれが唄うのか私の城下町ー」とお付けになる。こんな時他の会合では必ず順番が廻ってくるから、音痴で歌謡曲知らずの私はとたんに逃げ出したくなるのが常だ。その夜はどな

たにも、そんな素振りはないから実に居心地よく楽しかった。その夜の三時間余りは、私にとつて井上フアミリーの摩訶不思議の一つを発見した思いで先生を中心とするグループへの憧憬をこめてここに記録。常連の方から先生のこうした時のいつものお話をお聞きしたいものだ。

この想い出の日時とご出席の方のお名前を知りたくて佳子様にお尋ねのお電話をして、二村カメラマンがお亡くなりになった事を知った。あの夜楽しく遊んでいたいただいたお陰で、先年第一回井上靖記念文化財団の授賞式の日、お目にかかって二村氏と本当に親しみのこもったご挨拶が出来たことが思われて、心の底からご冥福をお祈りしている。

気取りもなく、青年のように「格子戸をくぐりぬけー」と歌い、楽しみ楽しませて下さった先生のことをもっともっと知りたく、それによって余

計なものを一杯抱えこんでいる私の人間改造を、せめて死ぬまでに果たしたいと思うが私にももう余りに日がないのだ。

五月十七日、午前中に竹林氏は金沢の仕事に戻られ、私は先生をご案内して能登畠山氏の菩提寺万福寺を訪れた。松波城の裏門を正門とするこの寺、万福寺の墓地の一番奥の一角に、城主畠山義親の墓がある。私が今まで見てきたさまざまの墓所のどれよりもひそやかに美しく、その人の生きた歴史をその儘に気品高く、その人が眠るに適わしい墓である。井上先生をご案内しても恥ずかしくなく、左右に竹藪を配した小暗さにも心が静まる。

時間の許す限り奥能登行をと飯田の町へ車を走らせる。飯田は佐渡の小木へ便船の通う港町で、物資の集散地としてやや立派な旅館もあり、朝市が立ち、茶道が盛んでこの辺での文化都市という

処だろう。郷土資料館の「喜兵衛どん」という立派な施設へもご案内。今回は内浦町役場から名手のカメラマンがついてきて下さったので、先生と竹林氏の山歩きや、万福寺や喜兵衛どんでのスナップを展覧会に飾ることができる。

(石川近代文学館 館長)

第二回

井上靖文化賞贈賞者決定

日本文芸評論家

ドナルド・キーン氏に

平成六年十一月十七日、東京千代田区の山の上ホテルにて、第二回井上靖文化賞贈賞者を決定する最終選考委員会が開かれ、一九九四年度の贈賞者は、ドナルド・キーン氏に決定された。即日同所において記者発表が行われた。

を研究して、日本国民が敗戦や異文化の流入の中でその価値を見失い、低く評価しがちであった時代にも、高い評価と意義を認め日本人自体にそれを示し、また外に向かつては、日本の内部に秘やかに営まれがちであったものを広く世界へと紹介した。この永年の努力と専門的実績に対して、大きな感謝とともに評価し、贈賞の推薦理由としている。

推薦理由 驚くべき広さと深さで日本の文化、文学

選考委員 大江健三郎 大岡信 司馬遼太郎、樋口隆康 平山郁夫 の諸氏。

井上靖文化賞とは この賞は文学者井上靖を記念し設立した賞で、日本文化の向上に資するため文学、歴史、美術等の広い分野において優れた業績をあげた人や団体に年一回贈られる賞である。

贈賞・顕彰は年一回。賞状および記念レリーフ（澄川喜一氏の作品）、賞金一〇〇万円が贈られる。第一回受賞者は音楽指揮者の小澤征爾氏。

受賞者略歴

一九二一年、ニューヨークに生まれる。

一九四二年、コロンビア大学卒業後、海軍日本語学校入学、ケンブリッジ大学大学院修士課程修了後、日本語学の講師となる。コロンビア大学文学博士。

一九五三年 京都大学に入学。

一九六〇年 コロンビア大学日本語・日本文学教授。

一九六二年 菊池寛賞受賞。

一九七五年 米国アカデミー賞受賞。

一九七九年 ケンブリッジ大学文学博士。

一九八四年 日本文学大賞受賞。

一九八五年 読売文学賞受賞。

一九九一年 全米文芸評論家賞受賞。

一九九二年 コロンビア大学名誉教授。

一九九三年 NHK放送文化賞受賞。

著書に「日本人の西洋発見」「日本の文学」「日本の作家」「日本文学史」「古典の愉しみ」刊行中の「日本文学の歴史」ほかがある。

中国人民对外友好協会代表
団 旭川の井上靖記念館へ

浦城 幾世

文遲氏を団長とする中国人民对外友好協会代表団一行六名が平成六年十一月四日、日本中国文化交流協会の招きにより来日した。大阪、東京、旭川、札幌を訪れ、十一月十四日帰国した。一行は次ぎの方たちである。

文遲団長 中日友好協会副会長、对外友好協会理事、

書道家、一九四三年生。

王林旭 中央民族大学教授、著名な画家、一九五九

年生。

韓嗣儀 「博覧群書」編集長、詩人、作家。

呉瑞鈞 中国人民对外友好協会理事、中国友好協会

副秘書長。

許金平 中日友好協会理事。

袁敏道 中国人民对外友好協会幹部。

「文遲さん一行が旭川の井上靖記念館に行きたいとの希望ですが」という電話が日中文化交流協会からあった。

文遲さんといえば、昭和五十三年八月、当時まだ元氣だった父と母、それに夏休みでもあったので私の娘も加えていただいて、北京、上海、内モンゴルへ日中文化交流協会の方たちと出かけた時、同行して下さった方だ。その後駐日公使として来日されていたこともある。

旅行から六年たった昭和五十九年の春、六本木にある中国大使館から招待状が届いた。父と母、弟修一夫婦、私たち夫婦と子供二人はオシャレをして出掛けていった。次々と出てくるご馳走や、楽しかった会話を

忘れることは出来ない。

旭川では、教育委員会、井上靖記念館、友の会（井上靖ナナカマドの会という）の方々が、胸に日中の旗のバッジをつけて、代表団一行を温かく迎えて下さった。父がナナカマドの赤い実のランブと詠ったナナカマドの街路樹は赤い実を一杯つけていた。

記念館の展示室には、父の日中交流の歴史が写真入りのパネルで展示してあるのを特に興味深くご覧になっていた。またナナカマドの会の方たちは着物姿で館内のラウンジでお茶を点てて歓迎して下さいました。

翌日の午前中、当地の書家、梅田雪嶺さんとの書の交流が行われた。

『文学巨匠駐日文化交流先駆』

訪 井上靖先生記念館尚念

一九九四年十一月十日 文運

「文学の巨匠である井上靖先生は、中国と日本との文化交流を人に先立って行った。」という意味の書をこの時書いて記念館に贈って下さった。

王林旭氏は水墨画の大家で、中国政府の要人が外国を訪問する際、その国の要人に贈る記念品として、氏の作品がたびたび使われているそうである。「井上先生の業績をたたえ、私の絵を記念館に残したい」と言って水墨画で竹の絵を描いて下さった。

北海道らしいところへ行きたいという希望を入れて、屋敷は旭川から一時間余りのところにある美瑛町へ車で案内した。広い田園を見慣れた中国の方たちには、どう映ったか分からないが、意外だったのは雪をかぶった大雪山や十勝連峰の山々を非常に珍しがられ、盛んに記念写真を撮っておられたことだ。

平成七年一月二十九日

井上靖の故郷、天城湯ヶ島
町に「しろばんば」の碑が
完成

「しろばんば」は伊豆湯ヶ島で幼年期を過ごした井上靖の自伝的小説。「しろばんば」の碑だけはこの町にしか建たないのだ、という言葉に、この町の人々のこの作品に対する深い愛着が感じられる。実際「しろばんば」には実在の人物がモデルと考えられる多くの登場人物がいて、町の人々によって「ああ、あの人の家、あの場所、」と思いあたられるそのような小説であるため、この碑を造るに当たっても、個人から職場から、学校から、信じられないほどの多くの援助が集まり、参与した人の数だけみても、冷たい石が温

かく感じられるほどである。その結果非常に美しい碑が完成した。

この山々に囲まれた町と、そこに生まれた作家井上靖と、作品の関係を正確に表現しきった大岡信氏の優れた撰文も刻まれている。

菊竹清訓氏設計の碑は、しろばんばのイメージに合わせた白御影石の碑石で、読む人が碑を回りながら碑文を読めるようにと円形に設計されている。

除幕年月日 平成七年一月二十九日

所在地 静岡県田方郡 天城湯ヶ島町湯ヶ

島旧井上靖邸跡

設立者 湯ヶ島町 しろばんばの会 他

撰文 大岡信

設計 菊竹清訓設計事務所 沼田石材

素材 白御影石

碑文

しろばんば

井上靖

その頃、といつても大正四、五年のこと、いまから四十数年前のことだが、夕方になると、決まって村の子供たちは口々に「しろばんば、しろばんば」と叫びながら、家の前の街道をあつちに走ったり、こつちに走ったりしながら、夕闇のたちこめ始めた空間を綿屑でも舞っているように浮遊している白い小さい生きものを追いかけて遊んだ。

撰文

しろばんばの碑に題す

大岡 信

井上靖は文壇の巨匠と仰がれながらも、一方では満天の星のもと、ただ一人宇宙と対座することに至上の喜びを見い出す、魂の永遠のさすらい人だった。彼の謙虚でしかも限りなく勤勉な精神が生んだ業績は巨大だったが、その仕事の根源には、世間的な意味での栄達とは全く無縁な心、わが好むところを好むがままに追及して飽くことを知らぬ、自由で孤独な夢想家の心が住んでいた。井上靖の中には朴訥な

自然児が終生息づいていたのである。この自然児を搖籃期にはぐくんだのは、伊豆湯ヶ島の地にほかならない。

「しろばんば」は、そのような心がどのようにして誕生し、成長していったかを語る自伝小説である。井上靖の生涯と業績を思うとき、おぬい婆さんと洪作少年がこの地で営んでいた一風変わった生活が、いかに重要な意味をもっていたかを思い見ずにはいられない。

洪作は遊び仲間と同じ腕白少年だが、同時に沈着な内省家である。彼は幾重にも閉ざされている自分の生活圏から、徐々に外界へ向けて自我を押しひろげ、大地を踏みしめて歩みはじめる。大正時代の伊豆の小村湯ヶ島で一少年が営んでいた、つましくも夢多き幼少期の生活が、ひろく豊かな世界との接触の一步一步だったのを見ることは、この小説の読者に、ある爽快で暖かな読後感と、そして励ましとを与えるであろう。

(黒田佳子)

財団事業報告

井上 修一

平成六年度の本財団の活動の主なものを御報告いたします。

(一) 第二回井上靖文化賞の発表ならびに贈賞。

文学、美術、歴史等の分野の専門家、作家、評論家、ジャーナリスト等の方々から御推薦をいただいた贈賞対象を数次にわたる選考で絞り込み、平成六年十一月十七日、選考委員の先生方による最終選考が山の上ホテルで行われました。その結果ドナルド・キーン氏に贈賞が決まり、当日引き続いて選考結果ならびに選考理由に関する記者発表が行われました。また平成七年一月二十日には百四十余名の方々の御参加を得て、同

じ山の上ホテルにて贈賞式が行われました。

第一回受賞者の小澤征爾氏、第二回受賞者のドナルド・キーン氏とお名前を並べてみますと、おかげさまでこの賞の性格もかなり固まってきたような気がいたします。なによりも選考委員の先生方の御尽力の賜物と心より感謝いたしております。なお選考委員の先生方は大江健三郎、大岡信、司馬遼太郎、樋口隆康、平山郁夫(五十音順・敬称略)の五氏です。

(二) 滋賀県伊香郡高月町立図書館内「井上靖記念室」にて平成六年三月十五日から五月十五日まで本財団後援で「水に関する風景」の写真展が行われ好評を得ました。

(三) 高松市立図書館内「菊池寛記念館」にて平成六年五月十五日から七月三日まで本財団協賛で「井上靖展」が成功裡に行われました。またこの文学展の初日と最終日には財団から講師を派遣し、講演会が催されました。

(四) 米子市の「アジア博物館・井上靖記念館」に

て両館の開館一周を記念して平成六年八月十五日から十一月十五日に特別展「井上靖展」が本財団の後援のもとに行われました。また最終日の翌日の十一月十六日には同所にて本財団の講師派遣により「ソロブチストの会」で講演会が行われました

(五) 世田谷文学館と世田谷区が共催で平成六年十月十三日から二十六日まで行った文学展「世田谷ゆかりの文学者たち」(プレイベント回収蔵品展)に出品協力しました。

(六) 中国人民対外友好協会代表团(团长・文運)一行を平成六年十一月十日、十一日の両日、旭川市立「井上靖記念館」に案内し、大変喜ばれました。

(七) 平成七年一月三十日に静岡県田方郡天城湯ヶ島町にある本財団所有地(旧井上靖邸)で文学碑「しろばんば」の設立除幕の式が執り行われました。これは、本財団とともに地元の天城湯ヶ島町ならびに同所の「しろばんばの会」が企画し、静岡県ならびに天城湯ヶ島町の財政支出を得、「しろばんばの会」ならび

に町民の方々からの多額の御寄付によって実現したものです。

楕円形の柱筒状の白御影石に小説「しろばんば」の冒頭を井上靖の自筆で刻み、本財団理事で同じ静岡県(三島市)御出身の大岡信氏より撰文をいただき、設計は沼津市千本浜公園の井上靖文学碑と同じ菊竹清訓氏にお願いたしました。お世話になった方々にはこの誌面を借りて改めて心より感謝の意を表させていただきます。

また同日引き続き、同町農村環境改善センターにおいて行われた「追悼・井上靖」講演会には講師を派遣いたしました。

なお、本財団の理事、評議員の任期は平成六年三月三十一日をもって切れ、四月一日より理事、評議員が新しくなっております。大半の方々は再任をお引き受け下さいましたが、御都合により理事の服部敏幸氏、評議員の角川春樹氏のお二方が御退任になりました。

本財団設立当初から御指導、御尽力に心より御礼申し上げます。

代わって理事に野間佐和子氏（株式会社講談社社長）、

評議員に角川歴彦氏（株式会社角川書店社長）の御就任をいただきました。厚く御礼申し上げます。

したがいまして平成六年四月一日からの新しい理事、評議員の方々は次のようになっております。

理事長 井上ふみ

常務理事 井上修一

理事 大岡信 相賀徹夫 上林吾郎 小西

甚右衛門 佐藤亮一 司馬遼太郎

高碓芳郎 徳間康快 野間佐和子

平山郁夫 横地治男

監事 三木啓史

評議員 井上卓也 浦城幾世 大越幸夫 尾崎

秀樹 角川歴彦 黒田佳子 嶋中鵬二

高野昭 高原須美子 仲木都富 緑川

亨 (五十音順・敬称略)

井上靖に關係する全国の碑

沼津 駅 前 の 碑 静岡県沼津市沼津駅前

沼津 千本浜 の 碑 静岡県沼津市千本浜公園内

宝蔵院 の 記念 碑 東京都葛飾区奥戸八丁目

観音院 の 由布姫 の 墓 長野県岡谷市湊四の十五の二十二竜光山小坂観音院

熊の山墓地慰霊 碑 静岡県田方郡天城湯ケ島町湯ケ島

修善寺工業高校の 碑 静岡県田方郡修善寺町

世界貿易センタービルの定礎 東京都港区浜松町二一四

静岡県西武百貨店前の 碑 静岡市紺屋町六の七

足立文太郎の 碑 静岡県田方郡天城湯ケ島町湯ケ島

千葉 亀雄 の 碑 宮城県遠田郡小牛田町鶴頭公園内

明日香村の道 標 奈良県桜井市

室生 犀星 の 碑 石川県金沢市二俣町医王山小・中学校校庭

駿河平の井上文学館の 碑 静岡県駿東郡長泉町駿河平

佐藤 春夫 の 碑 長野県佐久市岩村田西本町

内 灘

碑 石川県河北郡内灘町宮

福栄小学校の記念碑 石川県日野郡日南町

波佐見市の今里広記の碑 石川県波佐見市

昭和の森標 石川県日野郡日南町

日南町の森標 石川県日野郡日南町

昭和の森開館の碑 石川県日野郡日南町

湯ヶ島小学校の碑 石川県日野郡日南町

滑沢溪谷の碑 石川県日野郡日南町

徳田秋声の碑 石川県日野郡日南町

渡岸寺の碑 石川県日野郡日南町

硫黄島の鎮魂碑 石川県日野郡日南町

山本健吉の碑 石川県日野郡日南町

松本亀次郎の碑 石川県日野郡日南町

日和山公園の碑 石川県日野郡日南町

箱根八里記念碑 石川県日野郡日南町

「微笑みをたたえて」の碑 石川県日野郡日南町

石川近代文学館の碑 石川県日野郡日南町

長崎物語の碑 石川県日野郡日南町

沼津市民文化センターの碑 石川県日野郡日南町

天龍川河川敷の碑 石川県日野郡日南町

沼津東高校の碑 石川県日野郡日南町

風間浦村の碑 石川県日野郡日南町

飛騨民族村文学散歩道の碑 石川県日野郡日南町

旭川信用金庫前の碑 石川県日野郡日南町

新高輪プリンスホテルの碑 石川県日野郡日南町

鑑真和上嘉瀬津上陸記念の碑 石川県日野郡日南町

沼津市妙覚寺の碑 石川県日野郡日南町

長崎の諏訪神社内今里広記の碑 石川県日野郡日南町

大黒屋光太夫の碑 石川県日野郡日南町

日南町の井上靖記念館の碑 石川県日野郡日南町

高月町立図書館前の碑 石川県日野郡日南町

上山田の碑 石川県日野郡日南町

旭川井上靖通りの碑 石川県日野郡日南町

三島市水辺の文学の碑 石川県日野郡日南町

「しろばんば」の碑 石川県日野郡日南町

第三回 井上靖作品読書感想文コンクール

(平成六年度入選作品中・小学生の部「優秀」作品)

『しろばんば』を読んで

天城湯ケ島町立 月ヶ瀬小学校五年

小森 史乃

(なぜ、人は死んでしまうのだろう。)

と、わたしは思いました。親しい人、家族、そんな人が死んでしまったら、とても悲しいと思います。でも、それが、わたしたちの運命なのだと思います。

洪作は、今まで育ててくれた、おぬいばあさんをなくしました。洪作は、信じられなかったでしょう。あまりのショックで泣けなかったでしょう。わたしはそんな洪作がかわいそうでなりませんでした。洪作とお

ぬいばあさんは、血がつながっていません。なのに、おぬいばあさんは、洪作をすごくかわいがってくれました。わたしもおばあちゃんはいます。血のつながった孫だから、すごくかわいがってくれます。いろいろお願いしても一生けんめいわたしや妹のためにやってくれます。おかしを買ってくれたり、はんでんやゆかたを作ってくれたりします。おぬいばあさんは、わたしにとってのおばあちゃんと同じで、洪作にとっても、

すごく大切な人です。だから、本当の孫のように洪作をかわいがれたのでしょう。愛情の深い人だったのでしょう。洪作は、親からはなれても、おぬいばあさんがいたからさみしくなかったのだと思います。また、洪作が、おぬいばあさんのことを、大切な人だと思う気持ちが感じられたから、おぬいばあさんも洪作のことをかわいがったのだとおもいます。おぬいばあさんにとって、洪作は、生きるエネルギーのもとだったとおもいます。

洪作にとつてもうひとり大事な人をなくしてしまいました。さき子です。さき子は、洪作の母の妹です。洪作は、さき子とよく西平の湯に行きました。いっしょに楽しい時間をすごしました。さき子も、洪作にとつてもやさしい人でした。洪作をとつてもかわいがつてくれました。だから、さき子が、死んだことも、洪作にとつては、すごく悲しかったと思います。

しろばんばには、何十人もの人が出てきました。どの人も個性があつて、ふんいきが目にかぶようでした。

た。いろいろ洪作とかかわつていきますが、みんなやさしい人たちだと思いました。その人たちと、いっしょに遊んだり、話したり、生活する中で、洪作は、どんどん大きくなつていった感じがします。

この本の洪作は、五さいのときから、天城の村の土着の中ですくしました。天城や伊豆の中の地名がたくさん出てきて、昔の天城の様子がわかりました。特に、小学校の校長先生だったおじさんの家は、わたしの住んでいる門野原です。近所にそこらしい家があるので、この小説や洪作が、すごく身近なものに感じて、不思議な気持ちで読みました。

最後に、洪作はふるさとに別れることになります。いろいろな思い出のあつたふるさととはなれる時は、何ともさみしい思いでいっぱいだったと思います。わたしはいつか、自分のふるさとの天城をはなれることがあるかもしれません。その時洪作のことを、ふと思ひ出すかもしれません。



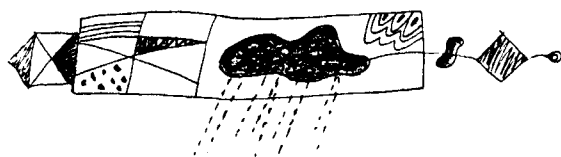
雨あがり

井上靖

雨がやんだ。校庭には水たまりが沢山できている。

太平洋、地中海、日本海、
希望峰もあれば千島列島も
ある。

だが、僕が一番好きなのは、



地球のどこにも見当らぬ小
さい新しい海峡だ。

遊動円木の蔭をうつして、
その名知らぬ日暮れの海峡
には、さざなみがいっぱい
立っている。

詩集『井上靖全詩集』所収

編集後記

大変遅れてしまいました。が、「伝書鳩」二号が出来上がりました。今回は、全国に幾つかある井上靖の関係する文学館や記念館などの特徴や活動の様子を知って頂けたならば、という思いから特集を企画いたしました。

多くの方に原稿をお願いいたしましたが、皆さまお忙しい中を、快くお引き受けくださり、しかも、お願いの主旨が地味で事務的になりがちであったにもかかわらず、心の籠った内容ばかりで、編集しながら、嬉しい気持ちでいっぱいでした。

これからも微力ながらいろいろな角度から、井上靖に関する活動や知識をお知らせすることを心がけつつ編集し、次ぎの号へと取り組みたいと考えております。

また、こちらの希望を気軽にくんで下さり、明るいカットを描いてくださった浜田夏子さんの御協力に感謝いたします。

ご意見、お気づきの点は、編集係までお知らせいただければ、と思っております。

黒田 佳子

伝書鳩 第二号 一九九五年四月発行

編集者 黒田 佳子

発行 横浜市青葉区新石川三一八一九
(財) 井上靖記念文化財団